

日本人に真実を、誇りを、民力を。

「本物の情報」「本物の洞察」を共に創る新しいメディア

ザ・リアルインサイト
The REAL INSIGHT

2017年12月号コンテンツ

江崎道朗氏インタビュー 収録映像文字起こし

<目次>

動画1	「コミンテルンの謀略とスパイ天国・日本」	2
動画2	「スパイ・謀略・インテリジェンス」	23
動画3	「日本のインテリジェンス力強化に何が必要か」	47

動画1 「コミンテルンの謀略とスパイ天国・日本」

00:00

今堀：こんにちは、リアルインサイトの今堀です。今月のインタビューは、評論家の江崎道郎（えざき・みちお）先生にお話をお伺いします。よろしくお願い致します。江崎先生は1962年東京都にお生まれで、九州大学をご卒業後、雑誌編集者や国会議員の政策スタッフなどを経て、安全保障、インテリジェンス、近現代史研究に取り組んでこられ、2014年より、月刊正論誌で「SEIRON 時評」を連載されるなど、積極的なご発言を続けていらっしゃいます。ご著作も多数刊行されており、昨年の大統領選直前には『マスコミが報じないトランプ台頭の秘密』で、アメリカのマスメディア偏向とトランプ氏勝利の可能性を主張されていました。最近刊には今年8月に刊行されたこちらの『コミンテルンの謀略と日本の敗戦』があり、11月下旬には『日本は誰と戦ったのか』が発売予定となっています。こちらの『コミンテルンの謀略と日本の敗戦』は400ページを超えるボリュームで、新書としてはかなりの大部になっていると思うんですけども、非常に好調な売れ行きだそうで世間の関心の高まりが伺えると思います。

本日はこちらのご著作の内容を中心に先生に、そもそもコミンテルン、共産主義インターナショナルとは何だったのか、そして先の対戦までにどのような役割を果たしたのか、ここから単純な左右対立で歴史を見ることの危険性、そして現在の日本でも非常に重要な課題であるインテリジェンスの強化について詳しくお話をお聞きしていきたいと思っています。それでは江崎先生、よろしくお願いいたします。

まずは1つ目のテーマと致しまして、こちらのご著作のテーマでもある「コミンテルンが戦前の日本に及ぼした影響と、なぜ日本がやすやすと、その謀略に影響されてしまったのか」について伺いたいと思います。まずは東京裁判史観等の見直し、こうしたことを発言すると歴史修正主義者（リビジョニスト）だという批判を受けることも多いのではないかと思います。2011年にはハーバート・フーバー元大統領の回想録である『裏切られた自由（Freedom Betrayed）』、こちらが今年邦訳も出版されましたけれども、アメリカでもこうした著作が刊行されたりとか、ルーズベルト元大統領の開戦責任、そしてその背後にあったコミンテルンの謀略を問い直す動きが出ているということなんですけれども、これはまだ日本国内ではそれほど知られていないんじゃないか

という気がするんですけども、まずはこうしたアメリカの保守派の動きについてお聞かせいただけますでしょうか。

江崎：繰り返し言っているんですけど、アメリカは一枚岩ではないんですね。日本にも自民党があって、民進党があって、希望の党があって、共産党がある。同じようにアメリカにも主に、共和党というのと、民主党という2つの政党が中心で、他にも小さい政党はあるんですが、この2つの政党があって、尚且つ共和党の中でも自民党の中にも安倍総理みたいな考えのような人もいれば、野田先生や二階先生みたいな人もいる。だから政党の中でも同じように、共和党の中でもどちらかというと、かなり保守的な人もいれば、かなりリベラル系、左翼に近い人たちもいる。だからアメリカの中、非常に様々なんですね。それなのに日本の報道はどちらかというと、安倍総理がやっていることと、鳩山由紀夫総理がやったこと民主党の、をごっちゃにして、鳩山さんがこういうことをやっているから日本は反米だとアメリカから言われると、それは鳩山民主党がやったことじゃないかというのと同じで、先の戦争では我々アメリカと戦ったんじゃなくて、当時は、アメリカはルーズベルト民主党政権でして、当時の共和党はこのルーズベルト民主党政権がやっていることに物凄い反対をしていたんですね。

05:08

具体的に言うと、これも基本的なアメリカの枠組みなんですが、アメリカは対日政策で言うと2つ大きくグループがありまして、いわゆるストロング・ジャパン派とウィーク・ジャパン派と言うんですが。ストロング・ジャパン派というのはどちらかというと、アジア太平洋の平和を乱しているのはソ連や中国の排外ナショナリズム、それを抑えようとして日本はピース・キーピング・オペレーション、国連平和維持活動を中国大陸にやっているんだと。そのやり方は乱暴かもしれないけれども、基本的に日本はソ連や中国を抑えて、平和を守ろうとしているグループだと思っている人たちがアメリカの中のストロング・ジャパン派。これは強い日本がアジアの平和をもたらすという考え。

ウィーク・ジャパン派というのは逆で、日本が軍国主義国家で日本がアジアの太平洋の平和を乱す勢力だから、日本を叩きのめせばアジアは平和になるという考えで、真っ二つだったんですね。当時のルーズベルト民主党政権はウィーク・ジャパン派で、ストロング・ジャパン派の人たちはどっちかというと共和党系と、あと民主党の中の反ルーズベルト派の人たち、このグループはストロング・ジャパン派だった。このまず戦前から

アメリカはこの日本に対する対応が全く違っていたという、その大きな図式がなくて、「アメリカは一貫して日露戦争以降反日だ」みたいな、それ自体が僕からすれば、蓮舫さん、鳩山さん、安倍さんをごっちゃにしているので、そんな杜撰なおおざっぱな歴史の分析で日米関係を論じるのはどうなのと。そもそもの話でいうとあまりにも杜撰だよなと。

今：そうですね、極端なことを言えばアメリカという一つの人格みたいにとらえちゃいますよね。

江：とらえてしまって、アメリカなんてありえないんであって、ルーズベルトは、フーバーは、であってそういうそれぞれの考え方で違うわけで、繰り返しますが鳩山由紀夫さんと安倍さんをごっちゃにして日本を論じる国際政治学者がいたとして、その国際政治学を我々、アメリカ人でもアホかといいますよね。それと同じで日本の歴史学者や、政治学者がルーズベルトとフーバーと民主党共和党をごっちゃにして「アメリカは一貫して日本叩きをしている」、アホかって。その基本的なアメリカの内情分析が全然できていないというのがあって、その上でずっと日本で紹介されてきたウィーク・ジャパン派。ルーズベルトの言っていることだけがアメリカだという風に、そういう言論操作をずっとされてきたわけですが、ようやくやっぱりストロング・ジャパン派のその代表格が、このハーバート・フーバーというルーズベルト大統領の前の大統領であって、こういう議論がようやく日本でも紹介されるようになってきたということだと思います。

今：これはもう、とてもいいことだと。

江：いいことだと思います。多様なアメリカの議論というのは、きちんと日本で紹介されるようになって、日米の、いわゆる日本のメディアの言論統制というのがようやく打ち破られるようになってきたということだと思います。

今：そうなんですね。今のお話のように、まさにあの対戦の前にそのようなストロング・ジャパン派という考え方が対向にあったこと自体、全く知られていないと思います。

江：全く知られていなくて、要するにアメリカを一枚岩で一貫して日本を侵略国家という風に痛めつけようとしていたというのは、それは違う。わかって言っているとすれば

悪質だし、わからないでもし言っているとすれば無能だし、どちらにしたってひどいものですね。

今：どちらに転んでも嫌ですね。

江：どちらに転んでも嫌、ひどいものだ。アメリカは一枚岩ではない。繰り返しますが、蓮舫さんと安倍さんを一緒にするのはやめましょう。愚かすぎる。

今：そうですね。まずこの前提を頭に入れていただいたというところからですね。そのような意味では、実は非常に大きなエポックとなった出来事のはずなのですが、こちらあまり知られていないと思うのが、もう 10 年以上も前ですね。

10:02

前々大統領のブッシュ・ジュニア大統領が 2005 年に、リトアニアでしたっけ。

江：リガです。ラトビアというところですね。

今：ラトビアの首都で非常に重要な発言をしていて、ヤルタ海岸の米ソ合意、いわゆるヤルタ体制を史上最大の過ちの一つだったと批判したという、非常に大きな出来事があったんですけども、これもあまり知られていないように思われます。

江：基本的なことで言うと、今の現在の国際秩序というのは、第二次世界大戦、日本で言うと大東亜戦争ということになるんですが、先の第二次世界大戦が終わった後、国際連合を中心に国際秩序をつくっていくことにあたっては、世界の警察官と言いまして、アメリカ、ソ連、イギリス、中国——この中国というのは蒋介石政権、中国国民党の中国ですが、あとはフランス。このワールドカップ、5 カ国の世界の警察官が国連を中心にして世界の平和を守ろうというのが戦後の国際秩序と言われているものなのですが、この戦後の国際秩序の枠組みを決めたのが 1945 年の 2 月に行われた、アメリカのルーズベルト民主党大統領とソ連のスターリンという指導者とイギリスのチャーチルの総理大臣の三人が戦後の国際秩序の枠組みを決めたのがヤルタ会談というんですね。このヤルタ会談で基本的にアメリカとソ連とイギリスで世界を支配していきましよう、戦後。そうすることで平和を守っていきましようという枠組みを作った。それに合わせて

中国と、フランスを入れて5 大国といわれている。これが国連常任理事国という形で国連を今牛耳っているわけですが。この 5 ケ国に基づいてやった、この枠組みに基づいて、ルーズベルトはソ連に国連を作って世界を戦後、平和維持を守っていきましょう。国連を作るにあたって協力してくれないか、とスターリンに言った。スターリンは協力してあげていいけど、その代わり東欧をソ連支配下に認めろと。アジアを基本的に満州やそういう所は我々の支配下に認めろという、ディールですね、取引を申し出て、なんとルーズベルトはそれを飲んでしまったわけですね。その結果、戦後東欧諸国、チェコとかハンガリーとか東ドイツとかポーランドとか、ああいう国にはソ連の支配下になった。アジアで言えば、中国は中国共産党の国になり、朝鮮半島も北朝鮮が半分、北朝鮮という共産主義の国になり、あとベトナムという国も共産主義になっていくというような形の世界分割をやった。このヤルタ協定が愚かだったという風にブッシュ共和党大統領が言ったわけですね。だから、民主党鳩山由紀夫がやったことを安倍総理が批判したことと同じ。

今：その通りですね。

江：だから、そういう形でいうことで一番大事なのは、ヤルタ会談というのは国連を中心とした戦後の国際秩序の枠組みなので、一番の枠組みの根本をアメリカ大統領が批判した。戦後の国際秩序は間違っていたということをブッシュが言っちゃったので、当時ロシアはプーチン、前の時の大統領の時。

今：メドベージェフさんの前の時ですね。

江：その時のプーチンだって中国共産党だってキーっと言って怒ったわけですね。

今：それは激怒しますよね。

江：それくらい国際的には大問題だったんですが、なぜか日本では・・・。このブッシュはラトビアでのリガで演説をしてとにかくヤルタ会談で東欧諸国を共産主義の下に置いて、何百万という国民の人権を損なうようなことをしてしまったと。

15:06

非常に愚かなことを自分たちはやったと、これは間違いだったという言い方をした。これは繰り返しますが、ソ連と組んでそういうことをやったことが間違いだった。共産主義も間違いだったということを使ったという意味では画期的なんですね。

今：そうですね。これがやっぱり日本で報道されないのは、やはりそういうことなんだろうなという感じですけどね。非常に、なぜかこれはほとんどご存じない方が多いんじゃないかと思うんですけど。

江：だから日本のマスコミは残念ながら、記者達が国際政治の勉強や歴史の勉強をしていないので第二次世界大戦後、どうやって国際連合ができて、どういう形で国際秩序ができたのかという、大きな構図についてほとんど知らないんですね。

今：これがよく大戦の後に、例えばウエストファリア体制だとか、最近の大戦ではヤルタ体制だとか非常に大国が集まってその後の国際体制を決めるという非常に重要なことを認識していないところが多いんですね。

江：認識していないので、言っては悪いけど政治家の不倫だけを追いかけるとか。だから僕からすれば日本のマスコミというのは右とか左じゃなくて、単に視野が狭いだけで、それ以前の問題ですね。

今：まったくおっしゃる通りですね。

江：本当に右とか左とかいうとなんか高級そうに聞こえますが、イデオロギーの問題ではなくて、ただ視野が狭いだけです。僕からすればね。

今：そして、こういった流れを変えるきっかけになった大きな事実ではないかと思うのですけれども、ザ・リアルインサイトのインタビューにも過去ご出演いただいた、京都大学の中西輝政（なかにし・てるまさ）先生が監訳を務められた、こちらが10年は経たないと思うのですけれども、出版されて、残念ながら今は絶版になってしまっているのですけれども、中西先生がご紹介された「ヴェノナ文書」（『ヴェノナ』ジョン・アール・ヘインズ、ハーヴェイ・クレア著、中西輝政監訳、2010年）。これは、ソ連がアメリカに対して行っていた諜報活動・工作をアメリカが暗号を解読して非常に大きなプロジ

エクトとして行ったヴェノナ計画、1995年にこの「ヴェノナ文書」をアメリカが公開したということで非常に大きな、流れが変わるきっかけになったということになりますでしょうか。

江：そうなんですね。アメリカは一枚岩じゃないということについて言うと、戦前ルーズベルト民主党権が、日本を敵視してソ連のスターリンと連携しようとする。それに対してアメリカの共和党の人たちはものすごい反発して批判していたんですね。実は同じ疑問を持っていたのがアメリカの陸軍でして、U. S. Armyですね。U. S. Armyの情報部が、「ルーズベルト政権がやっていることはどこおかしい」ということで、ソ連の連中は何か変なことをやっているんじゃないかということで、ソ連のモスクワとアメリカ本土の機密電報を傍受して、暗号を解読するヴェノナ・プロジェクト（Venona project）というのを始めたんですね。

これは繰り返しますが、「ホワイトハウスがソ連にべったり過ぎる」と、これはおかしいと勝手に始めたわけです。陸軍情報部の人間が政権に内緒で。それでやり始めたら、実は暗号電報なので解読するには時間がかかるのとですね、例えば「ジュリストはニューヨークでアーサーと会った」と書いてて、ジュリストって誰、アーサーって誰。ジュリスト、アーサーっていうのはスパイのカバーネームで、本名を使うとばれるので。このジュリスト、アーサーって誰というので機密電報をまず解読して読めるようにした上で、この解読した文書の中身は何を意味しているのか、ということ进行调查する仕事を、アメリカの陸軍情報部と FBI（Federal Bureau of Investigation）というのがあるんですね。

20:12

これは連邦捜査局と言うんですが、この FBI というのはそもそも 1920 年ぐらいからコミンテルンのアメリカ支部ができてコミンテルンのアメリカ支部たちの動きを調査するためにできたという側面があるわけです。

今：成り立ちとしてそのきっかけがあったんですね。

江：FBI という連邦捜査局と、アメリカ陸軍情報部、途中からイギリスの軍の情報部、この三者が連携して情報収集分析をしていった結果、ルーズベルト政権、もっと言えばホワイトハウスや財務省の中にソ連のスパイがうじゃうじゃいることがわかってきた

わけです。わかってきて、やっぱりルーズベルト民主党政権の中にはソ連のスパイがいるのがわかってきた。この情報収集工作活動をやっていた。でもその記録というのが戦後公開されてこなかったわけですね。公開されてなかったんですが、その情報収集記録というのを 1995 年、冷戦の終わった後に公開した。このきっかけはソ連が崩壊したんですね。

今：あっち側から先に出てきているんですね。

江：ソ連が崩壊してエリツィンという大統領がいたんですが、ロシアになったときに。グラスノスチと言って情報公開という形で、ソ連、コミンテルンの文書を、当時エリツィンは金がなかったので欧米の歴史学者に売ったんですね。売った結果、コミンテルンのアメリカ工作の文書が出てきて、それでどうもやっぱりそれを見てると「アメリカの陸軍情報部も、そういう自分達の動きを察知しているようだ」と書いてあったわけです。それを見て、「なんだ、アメリカの軍の情報部も情報収集をやっているんじゃないか」と言ってアメリカの政治家たちが騒いで、結果的に冷戦が終わったので情報公開した。公開した結果、ルーズベルト民主党政権の中にソ連のスパイがいることがうじゃうじゃわかった。わかった分析を書いたのがジョン・アール・ヘインズと、ハーヴェイ・クレアという歴史学者達。この『ヴェノナ』という本を出したわけですね。

僕は 1997 年か 1998 年にワシントン DC に行った時にアメリカのヘリテージ財団というシンクタンクがあるんですね。そこにリー・エドワーズという人がいて、保守派の歴史学者なんです。彼と話をした時に、「お前歴史近現代史に関心があるならヴェノナって知ってるか」と言われて、「いや知らない」と言ったら「ヴェノナと言ってすごい文書が 96 年に公開されてアメリカで大騒ぎになっている」と。ヘリテージ財団の駅があるんですが駅の近くに本屋があって、「その本屋に行ってみろ」と。ヴェノナに関する本がいっぱい出ているから買って行けよと言われて、買って日本に帰ってきて中西輝政先生に話をしたら、中西輝政先生は当然ご存じで、じゃあそれぜひとも翻訳をしてくださいと言ったら中西先生はそのつもりでいるという中でこの本が翻訳になった。

今：こんな歴史的な重要な本を絶版にしちゃダメですよ。

江：これ翻訳でめちゃめちゃお金かかったのと、まさか PHP としてそんなに売れると思ってなくて、翻訳の著作料を初版分しか払ってなくて。ただ再販したほうがいいんじ

ゃないのと言ってるんですが、やっぱりペイしないと再刊するために、改めてこの原著者に対する印税と翻訳者に対する印税を払った時に、とてもこれじゃペイしないと。そんなにたくさん売れると思わないということで、PHP は再刊していない。

でもこのヴェノナのおかげでルーズベルト政権の中にソ連のスパイがうじゃうじゃいるという噂はあったのですが、これがアメリカの政府の公文書で確認をされた。言い方は良くないんですけどね。

25:01

例えばの話ですが、鳩山民主党政権の官房長官が、実は中国共産党のスパイだったみたいな情報が出たという意味です。例えの話です。あくまでも。だからそれくらいやっぱり衝撃的。

今：そうですね。非常に大物が、ハリー・デクスター・ホワイトだとか、アルジャー・ヒスだとか、冤罪説が強かったローゼンバーグ夫妻とか、なんだみんな本当じゃんという話だったんですよね。

江：皆やっぱりソ連のスパイだったんだということが、アメリカとソ連の機密電報と、ソ連そのものが出してきたこのリッツキドニー文書というのがあるんですけど、この2つの文書で明らかになっちゃったので。

今：間違いないわけですね。

江：間違いないというか、ほぼそういうことで。もちろん例えばジュリスト。確かこれはアルジャー・ヒスのカバーネームなんです。ジュリストと言われているスパイが財務省にいることはわかっていた。

今：その同定が難しいわけですね。

江：難しいです。ただ、ほぼジュリストがアルジャー・ヒスであるということについて、このヘインズ達が、ハーヴェイ・クレアとですね。論証してそれに対して、それまでアルジャー・ヒスをかばっていたアメリカのどっちかと言うと左翼の歴史学者も否定できなくなってしまったということですね。

今：これ結構間違いなく大物であっても、特定に至っていない人達もいるんですよね。なかなか大変なものなのでしょうね。

江：これは何かと言うとアメリカの機密電報というのは、このヴェノナというのは 5000 枚ぐらいで機密電報があるわけですが、逆に言うと 5000 枚くらいしかないんです。要するにアメリカとソ連の間での暗号電報というのは、すさまじい数があるうちの 5000 枚しかできていない。それ以外のものは解読ができないんですね。

今：ありますよね、ここから先がわからないとか。まだ不明なことはたくさんあるわけですよね。

江：そこはあくまでもある程度わかったものだけでもこれだけのことがわかってきたと。ですから繰り返しますが我が国はルーズベルト民主党政権と戦ったわけですが、ルーズベルト民主党政権をソ連のスパイ達が裏から牛耳って操っていたということが、このアメリカの公文書だけで明らかになったという意味では大騒ぎにアメリカではなっているんですけども、日本ではこの動きは紹介されない。

今：まずは「ヴェノナ」という名前だけでも先に覚えていただければ。今後のために。このヴェノナで明らかになったまさに今のルーズベルト民主党政権の多数のスパイがもぐり込んでいたという事実が判明した、この政権の問題点について、簡単に教えていただけますでしょうか。

江：例えば日本は真珠湾攻撃に至って日米開戦をしたわけですね。日米開戦をしたということについて歴史を知ってる人はわかりますが、当時の日本側はアメリカと戦争したくなかったんですね。だから日米和平交渉をずっとやっていて、アメリカ側も当時の国務省と言われている人達は、日本と戦争しても何の利益にもならないということで、日本との戦争回避をするための和平合意をやろうと一所懸命努力をしていたんですね。ところがその和平合意を潰すキーマンになった人間のうちの一人がハリー・デクスター・ホワイトという人なんです。この人はいわゆるハル・ノート（合衆国及日本国間協定ノ基礎概略）と言いまして、ハル・ノートという形で日米が戦争を回避するために、アメリカとしては日本に対して経済制裁を止める代わりに、中国大陆から撤兵しろ。撤兵

するだけじゃなくて日本の軍の、軍艦とかなんかをアメリカに全部ほとんど売れみたいな、というようなむちゃくちゃな要望事項を出した結果、日本はもうこれは開戦やむなしとなったわけですが。

30:07

このハル・ノートを作ったのがハリー・デクスター・ホワイトという財務省の高官なんですけれども、彼がソ連のスパイだった。もう一つは、実は11月25日の段階で本当は日米和平交渉が成り立つ予定だったんです。成り立つ予定だったんですが、その日に蒋介石メッセージというのが来まして、蒋介石が「アメリカと日本が和平合意をすることは我が中国をアメリカが見捨てることです」と、そんなふざけたことはしないでくれという風にルーズベルトに直訴するメッセージを送ってきてるんですね。このメッセージを送ってきたことで、アメリカの國務省も中国を見捨てるわけには行かないという形で対日強硬説に転換したんですが、この蒋介石メッセージというのがあるんですね。蒋介石メッセージをほぼでっちあげたと言われているのは、ラフリン・カーリーという大統領補佐官と蒋介石顧問だったオーウェン・ラティモアという人だったんですね。この2人がそういう風な工作をホワイトハウスにやったわけですが。このラフリン・カーリーという大統領補佐官、ソ連のスパイで、蒋介石顧問であったオーウェン・ラティモアというアジアの専門家と言われる人は、限りなくソ連のスパイで。そういう形でルーズベルト政権をして、日本となんとしても戦争をやらせるように日本を追い詰める外交工作をやったのがホワイトハウス、ルーズベルトの側近達、つまりソ連のスパイだったことが明らかになったということです。この辺のことなんかに対しても、だから「日本は国際協調から外れて軍国主義になって戦争をやったんだ」みたいな書き方を日本の歴史学は言うんですが、僕はそういう側面がなかったとは言わないけども、ルーズベルト政権の中でそうやって日米戦争を望む連中達が、日米和平交渉を潰したという現実もきちんと見ておかなければいけない。僕はソ連がスパイ達によって日米戦争が全部起こされたとは言わないんです。あくまでも要因の1つ。

今：それは重要な視点ですよ。

江：重要な要因、ファクターをあえて見ないでいる日米外交史はどうなんでしょう。

今：そうですね。まったく触れないというのはおかしいですね。

江：触れないのはおかしいよねと。そういう形で、繰り返しますが、ルーズベルト政権は、日本との戦争を望んで、結果的にソ連のスパイたちに操られたところもあって、日本は追い詰められたという側面も合わせて見ておかないといけないぐらい、ルーズベルト民主党政権には問題があった。

今：そうですね、今お話いただいた事実も、ご存じない方が非常に多いと思いますので、コミンテルンが全てをやったとかそんな単純な話ではないけれども、これだけの動きをしていたんだと。歴史というのはそういう風に動いていったんですよというファクターとしては押さえておくべき重要なことばかりですね。

江：だから 11 月に『日本は誰と戦ったのか』という本を出すんですが、ベストセラーズという所から出すんですが、そこではスタントン・エバンズという、このフーバー回想録を書いたジョージ・ナッシュの盟友、同志であるスタントン・エバンズというアメリカの保守派の学者がいるわけですが、彼は「日米開戦はスターリンによってやられたんだ」という本を書いているんです。その本の紹介を今回出したんです。

今：楽しみですね。

江：そういう議論はアメリカの中でガンガン行われているんですよ。

今：それもやっぱりそういう動きがあるという事実を、ぜひ多くの皆様に知っていただきたいなと。

35:00

江：そうですね。繰り返しますが、アメリカには多様な議論があるので、本当にいろんな議論をアメリカの中で色々しているんだということを見做さないと、やっぱりアメリカときちんと付き合えないと思うんですね。

今：それでは次にですね、まさにこのホワイトハウスの中で暗躍していたコミンテルンのスパイ。コミンテルンについてお話を伺いたいと思うんですけども、そもそもコミンテルン、共産主義インターナショナルというのはロシア革命を 1917 年に行ったレー

ニンが1919年に設立した組織であると。そして、これはもともと第三インターナショナル——ここにもまた意味があると言うんですけども、第三インターナショナルとして登場したコミンテルンの概要とその目的について教えていただけますでしょうか。

江：今年がちょうどロシア革命から100年にあたるんです。ロシア革命って何かというと、レーニン率いるボリシェヴィキ——ソ連共産党という言い方のほうがわかりやすいと思うんですが、ソ連共産党は人類史上初めてロシアにソ連という共産主義国家、彼らは一応社会主義国家という言い方をしているんです。これは表現の問題なんですが、共産主義国家を初めて作って、その共産主義っていうのはここにいる視聴者の方はもう基本的にわかっている方は多いと思いますが、基本的なことを説明すると、貧富の格差が起きるのは、生産手段というのを特定の人が要するに持ってる。つまりお金持ちや土地や、工場を持っている人間だけがいつまで経っても金持ちで、労働者や小作人はいつまで経っても貧乏だと。こういう貧富の差は何から生まれているかという、財産を個人所有にしているからだ。

今：私有財産そのものが間違いであると。

江：私有財産が間違いであると。その通りです。だから全部国有財産にして、富を平等に分けていく仕組みにしていけば、貧富の格差は無くなってみんな平等になるじゃないかと。この考え方に基づいて、これをマルクス、エンゲルスの共産主義という言い方になるわけですね。だから私有財産の否定で、だからそうやって格差のない労働者天国を作りましょうというのが共産主義のスローガンなんですが、問題は金持ちとかなんとかから財産を奪う。でも奪うのは「嫌だよ」と当然言いますよね。資本家達だって地主だって。それを「抵抗する人間は労働者の敵だから殺してしまえ」。

今：暴力革命が前提なんですよね。

江：だから言うこと聞かないんだから、そいつらは全部殺してしまえという、今おっしゃったように、暴力革命とセットなんですね。「自分達の考えに逆らう奴は労働者の敵である。プロレタリアートの敵であるから殺しても構わない」というですね、非常に恐ろしい殺人というんですか。政治的に立場が違う人間を殺しても構わないという考えとセットなんですね。実際にロシアというのは当時帝国。ロシア帝国、帝政だったわけで

すが。ロシアの帝政、つまり国王達を全部殺し、貴族達も全部殺し、地主達も殺し、土地や財産を全部奪って、労働者に平等に分け与えるということはずに、ロシア共産党の幹部が独り占めをしたと。なおかつ自分達の意見に従わないやつは全部労働者の敵であると称して、レーニン率いる共産党に反発をした労働者も農民も片っ端から殺しまくったと。これがソ連という国でして。だけど表向きは労働者天国を作りましょう。この理想を世界に広めようという風にレーニンは言いまして。

40:00

広めるためにそういう世界革命を起こすんだと言って、世界に革命を起こすための支部を作ろう、これが共産党ですね。この共産党を世界中に作って、世界革命を起こすための世界の共産党のネットワークのことをコミンテルンと言うんですね。このコミンテルン日本支部が日本共産党。コミンテルン中国支部が中国共産党、今の中国政府の与党ですね。こういう形で世界に革命を起こしていこうみたいな、非常にやっかいなことを始めたのが、このコミンテルンという組織ですね。

今：そうなんですよ。そしてコミンテルンは非常に積極的に活動を展開し、世界的に活動していくことになったと思うんですけれども、その結果として、ソ連は第二次大戦の結最大の勝者であったというご指摘をなさっていらっしゃるけれども、それについて理由を教えてくださいませんか。

江：要は、第二次世界大戦前は共産主義の国というのはソ連とソ連の支配下に陥ったモンゴルの半分くらいだったわけですね。ところが第二次世界大戦が起こって、第二次世界大戦を利用しながら、ルーズベルト民主党政権と組んで東欧諸国をソ連の支配下に置いて無理やり共産主義の国にした。

今：本当に無理やりですよ。

江：同じようにアジアでも戦争に最終的に入ってきて、1945年の8月にアジア戦線、アジア太平洋戦線。つまり対日参戦をしまして、日本と満州に攻めてきて、満州を攻めることで中国全体に共産主義を広め、満州から朝鮮半島の半分で北朝鮮もソ連の共産主義にするという形で、アジアと東欧を一気に共産主義の支配下、つまりソ連の支配下に置くことに成功したのがソ連。実はアメリカは「デモクラシー対ファシズムの戦いだ」

と言って、第二次世界大戦をやる理由は世界にデモクラシーを広げるためである。一義的に言うと、そもそも第二次世界大戦というのはナチスドイツがポーランドを侵攻したことに反発して、ポーランドの民主主義を守れということから始まったんですね。第二次世界大戦はそもそも。このポーランドをソ連の支配下にあげることがルーズベルトは約束しちゃった。おかげでポーランドは民主主義どころか共産主義という全体主義でものすごい苦しいことになった。

だから政治的なことだけで言うと、戦争に勝ったのはルーズベルト、アメリカなわけですが、政治的に勝ったのはソ連のスターリンだったというのがこの第二次世界大戦の結果なので、世界の歴史家達は第二次世界大戦の最大の勝者はソ連であったという風に評するのは当然のことですし、このソ連の対日参戦のおかげで未だに日本は北方領土問題に苦しんでいるわけですから。そもそも北千島、千島全体もそうだし、南樺太だってサンフランシスコ講和条約で放棄させられましたけれども、別にそれがソ連のものだなんて何もなってないわけで南樺太、千島、および北方領土といういいかたも問題があるんですが、それを取られてしまったのもソ連がそういう風に勝手に取ってしまったという話ですね。

今：なるほど、よくわかりました。結局事前からずっと準備されていた通り、日米開戦をさせるべく動いて、結果として自分達は、特にアジアで言えば最小限の戦闘でかなりものを最後に持っていつているわけですね。そして共産圏の国を広げて、結果的には一番利益を得たのはソ連であるということですね。

45:01

江：これ基本的な話なんですけど、それまではソ連・コミンテルンという組織、ソ連が出てくるまでは、基本的には国際政治というのは軍事力と外交交渉で決まっていたわけです。この軍事力と外交交渉で国際政治というものの枠組みが決まっていた。勝者もそれで決まっていたわけです。ところがレーニンおよびスターリン、この人達、共産主義者達の彼らは天才的な能力を持っていて、彼らは軍事力や外交で国際政治が決まるわけではない。もっと重要なのはインテリジェンス、内部による情報スパイ工作こそが、国際政治を決める力だろうという風に考えたというのは、彼らの凄いことで、ルーズベルト政権、アメリカと戦争をして勝つんじゃなくて、アメリカを操って勝とうとしたわけです。致命的な違いでして、アメリカと戦争をして勝利を得ようなんていう愚かなことは

考えない。アメリカを操って日本を潰させて、アメリカによってドイツも潰させて、漁夫の利を得ることで自分達は勝利を収めようという発想を持っているのは非常にソ連というか、コミンテルンの対外政策の特徴なんですね。

今：そこが根底としての最大の恐ろしさなんでしょうね。

江：未だに日本は国防という、自衛隊というか防衛体制の強化と、せいぜいあと外交の問題しかやらない。でも実はもっと大事なのはこのインテリジェンス、スパイ工作とかそういうものが実は物凄い重要なんだということで、そこに特化してエネルギーを注いだ。というのがコミンテルンの非常に特徴的なやり方なんです。

今：結果としてかなり功を奏してしまったと。

江：そうです。そういう新しい戦い方に、当時の世界の国々は対応できなかった、という話ですね。

今：そこでルールを変えたのがコミンテルンであったということになるんですかね。

江：そうです。

今：これで、まさに日本に対しても様々工作は行われていたわけですがけれども、例えば非常に有名なのは日米開戦直前 1941 年の日本を震撼させたゾルゲ事件。こうしたものにも明らかなように、コミンテルンが我が国にも非常に大きい影響を与えていたと思うんですけれども、そもそもこの工作がうまく影響力を発揮してしまった根底にある戦前の状況として、先生がご指摘になっているのは、日本はエリートの日本と、これは言ってみれば伝統や文化を否定する「エリートの日本」と、こうした価値観をきちんと受け継いでいる「庶民の日本」に分断されてしまっていたというご指摘をされていていらっしゃるんですけれども、この内容はどのようなものだったんでしょうか。

江：これは明治維新に遡ってしまうわけですが、ご存じの通り、日本は当時明治維新のときはロシア、イギリス、フランス、アメリカ、こういう列強の国々がアジアを次々と支配、植民地化していく中で、とりわけ阿片戦争（1840-42 年）で隣の中国（清）もや

られていく。イギリスとかにですね。こういう状況の中でいわゆる徳川幕藩体制では日本の独立を保てないと、だからやっぱり当事者能力のない江戸幕府に代わって、皇室を立てながら薩摩・長州を中心とした有能な人材によって近代独立国家を作ることによって日本の独立を守ろうとしたわけですね。その結果、ひとつの明治維新という形になったわけです。明治維新になって、やっぱり日本の独立を守るためには当時軍艦とか大砲とか、そういう軍事技術とかを手に入れなければいけない。

50:10

軍事技術だけではなくて国民皆兵による軍隊も手に入れなきゃいけない。その軍隊と軍事技術を手に入れるためには近代産業国家にならなきゃいけない。なぜかという鉄砲や大砲を使えるようになるためには、鉄砲や大砲の弾や、爆薬や、そういうものを自分たちで作れるようにならなければいけないわけですね。欧米から輸入していたら、欧米から輸入を止められたら、戦えなくなるので。だから近代産業国家を作らなければ独立を保てない。だから明治維新政府は帝国大学を作りながら欧米の近代産業国家としてのノウハウを懸命に学んでいくということをやったわけですね。そのために東京帝大も含めた帝国大学を作った。

エリートたちはそれで欧米の近代帝国、近代国家のノウハウを懸命に学ぶわけです。これは、理由は何かと言うと、繰り返しますが、日本が独立を保つためには欧米の近代国家のやり方を学ばなきゃいけない。じゃあ近代国家が成り立つためにはどうしたらいいのかという時に、不幸なことに当時、例えばフランス、ナポレオン帝政の時代だったわけですが、フランスというのは当時近代最先端のヨーロッパの強国だったわけですが、フランスに流行っていた考え方、プロGRESS——進歩主義というものですけれども、宗教や歴史・伝統を捨てていきながら、新しいものを次々に導入することが近代国家なんだということがフランスの考え方だった。同じくイギリス、当時は、イギリスは社会主義全盛の時代でした。マルクスがいて、社会主義の考え方によって、資本主義は成り立つんだみたいなことを日本のエリートたちはイギリスやフランスに行って学んできたわけです。その結果、社会主義や進歩主義、日本の歴史・伝統文化を捨てるのが近代国家になるんだという風に誤解してしまったんですね。

今：そういう思想というか、進歩主義的な風潮のところで学んだということは大きかったわけですね。

江：それで学んでしまったということのもう一つは、当時は、江戸時代までは孝と言って親孝行、先祖供養といってお墓参り、先祖のお祀りをちゃんとやるのが大事。盆とか、お彼岸とか。ところがエリートたちは田舎から出てきて東大とか京大に来るわけです。お彼岸とかお盆に帰るといったって、当時は飛行機も新幹線もないんです。

今：簡単じゃないですね。

江：簡単に帰れない中で、お盆とか行けないわけです。先祖を守るとか供養するという価値観を持ってる人間からすると、辛いんですよ。そういう中でフランス側の進歩主義で、これからは伝統的価値観を捨てるのが国を発展させることなんだと言われて、俺達は先祖をお守りしたいとかそういう古い価値観や、家を継承したりとか、そういうものを持たなくていいんだという話になったわけです。という風になってしまったということで、資本主義も含めた新しい仕組みというのを導入するにあたって、それまでの古いやり方は捨てるしかないんだ、捨てるのが日本の独立を守ることになるんだという風に、エリートたちは思わざるを得なかった。だからエリート達は愛国心から来てるわけですが。

今：もともとの目的はそっちですもんね。

江：日本の独立を守るために欧米に学んだら、その欧米が進歩主義や社会主義だった。こういう状況の中で日本の歴史伝統なんかにこだわっちゃダメなんだ。

今：という考え方がエリートの中で主流になってしまった。

江：主流になってしまった。

55:00

でも普通の庶民たちは関係なく、ご先祖様を守り、地域の人たちとの付き合いをやりながら、お天道様に手を合わせてという古き良き日本の文化を、これまでやってきたことをやってきたと。でもエリートたちはそんなことを俺達がやっていたら、国は滅びるんだと言って。そういう意味で言うと、明治以降エリートの日本と庶民の日本という風に

完全に分離するようになってしまった。この悲劇があって、その中で資本主義が日本でも発展していくと、労働運動とかそういうのがどんどん出て来るし、イギリスでもフランスでもそういう社会主義、共産主義の考え方も入っていくと。社会主義、共産主義で行かないと日本は発展しないんだ。そうやって自分達が受け継いだものを捨てて、欧米に流行ってる考えに飛びつくことが国を発展させることなんだという誤解をしてしまったというのが戦前のエリートの大きな流れだったんです。

今：まさにこちらのご著作（『コミンテルンの謀略と日本の敗戦』）でも取り上げられていますけれども、ベルツの日記で知られているドイツの人医師のエルヴィン・ベルツの、「我々には歴史なんてありません」という風に東大の学生に言われて困惑したというエピソードをご紹介しますけれども、これも今のお話の通り、それは国の独立を確保するためという正しい目的の結果そうってしまったという悲劇があって、エリートにも本来大きな苦勞があったということだと思うんですけれども、これについて明治天皇がこのように亀裂が深まっていくことについて非常に憂えていらっしゃったという点を、ぜひお聞かせいただきたいなと。

江：東京帝国大学ができて、欧米の技術やプロGRESS——進歩主義とか社会主義とか、そういうような考え方がどんどん。それに学ぶことがエリートなんだという考え方が東京帝国大学を中心に行われ始めて、明治天皇は東大に視察に行って、こんな教育を受けていたら日本はどうなっていくんだと。何かというと、日本はどうやって独立を保つのかということは大事だけでも、それと同じように日本は日本として生きていかないといけないんじゃないかと。独立を保てても日本は日本で無くなってしまったら、何のための独立なんだと。つまり精神的な植民地になっていいのかというのは、当時の明治天皇の主要な懸念だったんですね。その中で我が国がやってきた、ご先祖様を敬うことや、歴史伝統文化を大事にすることや、皇室を中心にしたと日本の国柄を守っていくことや、そういうずっと日本がやってきたやり方は国際社会の中でも十分通用するものであって、日本は日本として生きていくことと、日本が欧米に学んで独立を保つことは両立するんですよというメッセージを送ろうとしたのが教育勅語。だからこれを世界中に示し世界の歴史を見ても我が国のやり方というものは十分通用するものなんだから、エリートの皆さんと日本のこれまでやってきたやり方を全否定するということはやめましょうよと、というようなメッセージを送ったというのは、あの教育勅語の意味合いだと思っています。

今：本当はそういうものであったということですね。

江：だからあれを国粹主義という言い方ですね、軍国主義みたいな言い方をするんですが、そうじゃなくて日本は欧米の精神的植民地でいいのか。

1:00:00

もっと言えば、デモクラシー。要するに議論を通じてより良い叡智を生み出していく。これは聖徳太子の時代の十七条憲法以来ずっとやってきたことであって、何でイギリスの議会制民主主義に学ばなければいけないんだと。イギリスの議会制民主主義よりも500年以上昔から我が国はそれをやってきたじゃないかと。また国民の利益になるための政治という概念も、これだって仁徳天皇の「民のかまど」と言って、要するに仁徳天皇さまがこうやって丘の上に立って、ご覧になったら全然ご飯を作ってるかまどの煙が立ってないと。民が食うものがなくなって苦しんでいると、だから税金取るのやめましよう、財務省の皆さんぜひ聞いていてくださいね。だから税金とるのやめましようと言って、結局3年間と言われてますけれども、税金を取らずにようやく丘の上に立ったら、民の家から煙が立つようになった。民のかまどは賑わいにけり。我富めりと。要するに、ようやく民のかまどが賑わって皆食えるようになってよかったね。と、そういうのが皇室のやってきた我が国の政治の本来の在り方なんだから、その本来の政治の在り方、哲学というものを我が国は持っているんだから、それをもう一度再評価するべきであって、何でフランスやイギリスやアメリカの歴史の浅い中途半端なものに惑わされなきゃいけないのというのが、この意味合いだったわけですね。ただ、この考え方がエリート達には届かなかった。残念ながら。正確に言うとそれを理解した人たちもいっぱいいた、でもそうじゃなかった人も結構いたんですね。

今：これは非常に重要な指摘だと思うんですけども、結局先生がおっしゃっているように、日本の独立は絶対に大事だけれども、日本じゃなくなって独立しても意味がないし、さらに明治の大帝がおっしゃっていたのはまさに十七条の憲法から民のかまどの精神で、日本は日本としてこういう国であって、そのやりかたと独立というのは両立するんだということをおっしゃっていたわけですね。

江：そうです。

今：それに対して、残念なことにエリートは今までのやり方、伝統は捨てて欧米流の新しい学問を入れて、それをしなければ独立は勝ち取れないというような、まさに先生がおっしゃった誤解にいつてしまったわけですね。

江：そうなんですね。あとはエリートの人達もせっかくヨーロッパに行って学んだものを日本に伝えると「先生、先生」と言われて、あの先生の言ってることはすごいですねと周りが褒め称えるので、自分のやっている学説を広めることは自分の立身出世につながるというエリート特有のエリート意識というんですか、独善主義というのか、そういうものもひとつあった。相まっちゃったということですね。

動画2 「スパイ・謀略・インテリジェンス」

00:00

今：次に戦前のエリートが進歩主義、あるいはさっきおっしゃった社会主義的な思想、これが当然ヨーロッパでは非常にブームというか、先端だったと思うんですけど、当然そこで学んだことも含めて、こうした社会主義的な思想に大勢のエリートが傾倒していったという流れがあると思うんですけども、この日本国内の背景について教えていただけますでしょうか。

江：それはとりわけ日清戦争、日露戦争。とりわけ日清戦争で賠償金をもらって、その賠償金を使って京浜工業地帯と言って、要するに横浜、川崎とか、千葉、大田区もそうですが、工業地帯を作って工業生産力を強めることで軍艦を自前で建造できるようになろうと。ご存じのように日清・日露までは欧米から軍艦とか買っていたので。自前で作る能力がなかったので、それをもちろん一部は作っていましたが、買っていたところが大きいわけで。自前で作るための工業国家を作ろうとした。ということは、工業国家を作るということは大量の労働者が増えていく。その労働者は例えば鉄の粉が舞っているところ、人糞が舞っている、炭鉱でいうと劣悪な状況、その中で貧しい人が懸命に働いて体を壊す。だって鉄の粉を吸い続けていれば肺がやられる。だけど当時は病院もちゃんとななし、健康保険制度もないし、という中で労働者達が非常に劣悪な環境で苦しんだんですね。横浜とか川崎とかああいうところ。それをやっぱり当時のエリート達は見てものすごく心を痛めたわけです。

これなんとかしなきゃいけないという時に、そういう労働者の待遇改善ということ saying したのは、当時は社会主義者達とキリスト教徒達なんですね。どっちかと言うと保守派の人は労働運動とか、貧民救済って実はあまり熱心じゃなくて。どっちかと言うと道徳強化とか、国防とか、歴史認識とか、そういうの皆好きなんだけど、外交問題とか。労働とか貧民救済とかそういうところになかなか行かない。

今：関心が薄かったという。

江：関心が薄かったことがあって、貧富の格差というものを何とかしようとした時に、

社会主義とかいうのが理論的な枠組みを作っていた唯一の学問。だからやっぱりエリート達の中で非常に人道的な人達、労働環境とか貧民救済をなんとかしなきゃいけないという人達は皆社会主義に傾倒していったんですね。これは人道的な立場なんですね。問題は社会主義とかに傾倒するエリート達を、馬鹿な右翼の連中が、社会主義を研究している人間を「売国奴だ」というレッテル貼りをして言論弾圧をしちゃったと。その結果ますます、この保守というか、伝統派の連中は貧しい人切り捨てで、同胞が苦しんでいることに対して同情心を持たないとんでもない奴らだという誤解を招く中で、ものすごいこういう貧しい人をなんとかしたいエリート達を一斉に左に追いやってしまった。これが大正時代から昭和にかけての当時の東大も含めたエリート達の大きな流れなんですね。そこをやっぱり見ておかないといけないのであって、社会主義に行った人達が非国民だったのか。そうじゃないんですよ。同胞の苦しみに心を痛めていた。もちろん保守派の中でもそういう苦しんでいる同胞の救援活動をやってる人達もいたんですよ。でもそれは大きな勢力になかなかならなかった。

今：主要な関心のところにはなかなか……、

江：ならなくて、言っただけ悪いけれども、戦前の保守派の人達は、我が国は神の国であるとかね。我が国は鬼畜米英とか欧米なんかには負けない、そういうイデオロギーを弄ぶというのか、誰かを排撃することで何かしたことに。

05:11

また社会主義の人達を批判することは、日本の国をよくすることだと言う風に誤解する人達が多かった。

今：すごく単純に捉えてしまって、敵だから弾圧するというような、すごくわかりやすいといえばあれなんですけれども。

江：そういう意味でいうと、保守派の人も繰り返しますが、「民のかまど」が本来なんだから、同じ工場労働者の人達がものすごく苦しんでいる。病院にもかかれなくて苦しんでいる。ものすごい才能があるにも関わらず、貧しいが故に大学に行けずに力を発揮できない。こういう人達をなんとかしようと本来動くべきだった。それをしなかった。

今：だから順番に言うと、保守の労働者が増えて過酷な環境に置かれる人々が増えたことに関する無関心を、エリートの一部は何とか救済したいと思って、その方法として社会主義の方法に、こちらの研究をするとか、そういう風に動いていった人々を、今度はいわゆる保守というか、先生が定義されている右翼全体主義者になってしまって、ただ単にこれは反日的なというか、間違った行為だからといって排撃してしまうということに、またここでも悲劇がありますよね。

江：そうやってレッテル貼りをして、批判をすることで物事が解決するのなら、こんな楽なことはないわけですが。そんなことで物事は解決しないわけですから。

今：ある意味先程のエリートと庶民の分断、そしてそのエリートの中でも今度は保守の側にもいわゆる全体主義的な動きがあって、これがいわゆる左翼的なというか、社会主義的な人々を弾圧することによって、また良くない結果が生まれていくことになってしまっているわけですね。

江：そうですね。

今：この「右翼全体主義者」、これは先生が便宜上考え方として定義されているとおっしゃっていますが、右翼全体主義者というものの勢力の概要とか、あるいは実際にいくつも言論弾圧をやっているわけですが、これについて聞かせていただけますでしょうか。

江：戦前、例えば東京帝国大学に上杉慎吉（うえすぎ・しんきち）という学者がいたんですね。彼は「天皇主権説」というのを唱えまして、日本は天皇中心の国であって、天皇の命令に従うべきであるというような学説を唱えた人なんですね。天皇の命令に従うべきというのは何かというと、天皇の命に基づいて官僚や軍は動いているんだから、官僚や軍の言うことに国民は従うべきだという官僚専制国家を唱える恐ろしい物事を考えた人がいるんですが、上杉慎吉達と一部の官僚達が結びついて言論弾圧をやっていたわけですね。どういう弾圧をしたのかというと、これは美濃部達吉（みのべ・たつきち）博士とか、佐々木惣一（ささき・そういち）博士とか、彼らはいわゆる天皇機関説を唱えたんですね。これは誤解のないように言うと、天皇機関説というのは国家というのは1つの法人格であると。この法人格の、要するに理事会の理事長みたいなものが、

言っては悪いけれど天皇様に当たる人で。では天皇が、理事長が決めたことは全部そうなるのかというと、そうじゃなくて、理事会で決めたことで物事は進んでいくんだと。そうやって天皇主権説になると、政治的な失敗は全部天皇の責任になってしまう。そうやって天皇に責任をなすりつけるような政治制度はやめて、あくまでも政治の責任は内閣が負う。但し、いざという時に天皇が出ていくのは構わないと。緊急事態で。という意味で天皇はあくまでも、普段は政治というものは内閣や国会に委ねていくというような仕組みであるのが大日本帝国憲法だという、本来の大日本帝国憲法の解釈を言っていた美濃部達吉博士や佐々木惣一博士だったわけですが、これに対して天皇を「機関」と呼ぶのはけしからんと。

10:18

天皇は我が国の主権者であると、主人公であるみたいなことを言って、美濃部先生や佐々木惣一博士の議論を徹底的に糾弾したのが上杉慎吉らグループで、なぜ上杉慎吉が問題なのかというと、上杉慎吉博士と美濃部先生は雑誌で論争しているんですよ。「天皇主権説」と「天皇機関説」。結論から言うと美濃部先生は勝ったんです。

今：圧勝に近かった。

江：圧勝に近かった。上杉慎吉はデタラメだから。デタラメで負けたくせに、要は負けた腹いせに「美濃部の言っていることは天皇機関で天皇を貶めている」というレッテル貼りをして、国民を扇動して、軍を、官僚を扇動して美濃部さんを潰す。国賊ですよ、こいつ。

今：本来国賊の方が、国賊だと言って美濃部先生を責めた。

江：美濃部先生達を弾圧した。美濃部先生達がそうやって自由な議論に基づいてより良い政治を作っていこうと、皇室のもとで、というのが美濃部先生の議論。それに対して上杉慎吉の言っている天皇主権説は、官僚や軍が決めたことは天皇の命なんだから従え、自由な議論は認める必要はないという圧政ですよ。

今：それを結局突き詰めていくと天皇の戦争責任みたいな話にもなってしまうわけですよ。

江：上杉慎吉の言っている天皇主権説に基づいて 1930 年代以降美濃部先生達は徹底的に弾圧されて、学問の自由が損なわれて、軍と官僚主義による専制政治が行われて、軍や官僚、もっと言えば東條英機（とうじょう・ひでき）や官僚の学説を批判する人間、政策を批判する人間、政府を批判する人間は全部非国民だというような愚かなことをやったのがこの上杉慎吉一派で。もっと言うと、「教育勅語」で言うと、明治天皇様は教育勅語を出した時は、大臣の副署と言って、賛同署名をわざと載せなかったんですね。これはなぜかと言うと、教育勅語は法律ではない。あくまでも明治天皇が個人として自分はこう思っているから、国民の皆さん一緒に頑張りましょうという呼びかけの文章だった。ところがこの上杉慎吉達が出てきて、天皇主権説を唱えて、天皇が唱えた教育勅語は法律的效果があるんだと。この法律に従うのが国民の義務であり、もっと言えば暗唱して一字一句間違いなく暗唱できることが愛国心であるみたいな、非常に愚かな上杉慎吉一派が文部省と一緒にやり始めました。その結果何が起こったかと言うと、記憶力が悪い子、あと多動症の子とか、暗記できない子いっぱいいるわけです。そういう国民は非国民扱いされた。あと内村鑑三（うちむら・かんぞう）先生みたいに良心的な人を、キリスト教徒であってちゃんと教育勅語に拝礼しなかったから非国民だと。そうやって天皇の命に従う人間以外は全部非国民だとレッテルを貼って、言論の自由を弾圧したグループが戦前上杉慎吉も含めた文部官僚や軍官僚にいて、そいつらが戦前の日本をぐちゃぐちゃにしたので、そういう連中達の問題点というのは徹底的に明らかにしなきゃいけないというのが僕の問題意識です。

今：いわゆるコミンテルンの謀略というのは、もちろん先程の流れから言えば社会主義に傾いていったエリートの中からも急進的というか色んな動きが起きてくるんですけども、左翼的な全体主義もあったと共に、この先生が定義されている右翼の全体主義者というのも、かなりの害悪を……、

江：かなりの害悪をやってますね。彼らがあんなことしなければ、いわゆる良心的な同胞の苦しみに心を痛めて社会主義にシンパシーを持った人間達をコミンテルン側に追いやることはなかったと思いますね。

15:02

今：そういうことになるんですね。だから結局正しいものを目指していた中に悲劇があ

ってというものと、後はそもそもまさに上杉慎吉なんていうのは言ってみれば学者の中の論争の異種返しみたいなことも含めて徹底的に論敵をあらゆる手段で潰そうとして、まさに異論は認めないという、先程のレーニンとかスターリンと同じことをやっているという意味でまさに右翼の側にも全体主義者がいたということなんですね。

江：だから学説として唱える分には僕はいいと思うんです。天皇主権説を唱えるのはいいと思うんです。僕は愚かだと思うんですが、ただその学説に従わない人間を全部非国民だとレッテルを貼って、排撃して、大学を辞めさせるところまで追い込む。こういう権力至上主義の連中達の、繰り返しますけれども、このやり方というのは本当に徹底的に糾弾しなきゃいけないし、彼らこそが日本をおかしくした原因の人間だと思うのに、その上杉慎吉達の天皇主権説が正しいと言っている人達が戦後保守派にいるわけですよ。愚か過ぎる。

今：そうですね。天皇機関説というのは、今のいわゆる保守系の人でも排撃というか、非難するに近い人がいらっしゃいますね。

江：天皇さまを「機関」とするのはけしからん。それは言葉の感覚としては理解しますがけれども、学説としての天皇機関説は、天皇さまに政治的責任を負わせないという仕組み。天皇機関説を否定する人は、天皇が全部責任を取って、政治がおかしくなったら天皇のせいだと突き上げるようにしろということですかと。ちゃんと勉強しないで、言葉尻だけ、概念とレッテルだけで物事を判断するのをもうやめましょうよ、本当に。

今：美濃部先生はまさにこれで攻撃されて、議員を辞職に追い込まれる時の弁明の演説でもおっしゃっているんですよね。不敬というか売国奴と呼ばれるのは耐えられないと。明治憲法で天皇、皇室を頂いて、その上での話をしているのに何故か「反国家主義者だ」みたいな攻撃に晒されたわけですね。

江：そうです。晒されてしまって、「万機公論に決すべし」と言う、明治憲法や五箇条の御誓文で明治政府が突き上げた基本的な方針ですが、そこでも国の運営の議論は自由な多様な議論に基づいてより良いアイデアを生み出して、そこで国の運営を決めていきましょうというのが我が国の基本方針なので。

今：歴史的にもそれが根幹なわけですね。

江：そういうやり方で我が国は政治を定めてきたわけですから、それを美濃部先生が言ったにも関わらず、その人間が非国民で売国奴という風にして排撃するのが昭和 10 年代なので、あの昭和 10 年代の右翼全体主義者達の横暴は許し難いですね。

今：この視点が結構新鮮な方も多んじゃないかと思うんですけども、非常に重要なポイントですね。やっぱり私も個人的にすごく共感したというか、ひどいなと思ったのは、この上杉慎吉らのやったことというのは、例えば教育勅語の暗記強制とか天皇機関説の排撃とか、これは明らかに明治天皇がおっしゃっていたこととは全く違うことをやったわけですね。

江：だから、教育勅語で示した明治天皇さまのお気持ちというのをきちんと歴史的に説いて、児童生徒に理解させていく努力は、僕はすべきだと思っている。それは本当に大事なことだと僕は思っているんです。でも教育勅語暗記できるかどうかは愛国心と何の関係もない。

今：全くその通りですね。できない子を排除してみたいな。

江：じゃあ多少知恵遅れと言っちゃ悪いけど、そういう子達は愛国心がないのか。ふざけるなって話ですよ。

今：先生の定義でまさに全体主義という言葉で右に行き過ぎても左に行き過ぎても、異論を認めないというところで、似たような行動を起こすことになっていってしまうわけですね。

20:09

江：そうです。僕はだから日本の保守派の議論の中で、自分の意見じゃない奴はけしからんと言って、もちろん僕は、それは議論をやる分にはいいと思うんです。批判は賛成なんです。

今：論争は大事ですね。

江：論争は重要だと思うし、大いにやっていいけれども、それと自分の言っていることに従わないやつはテレビに出させないとか、言論界から追放するとか、そういうようなやり方は別だろうと。

今：戦前からそういうことが繰り返されているということがよくわかりました。私がすごく印象的だったのは、こちらのご著作の最後に、タイトルも秀逸だなと思ったんですが、「近衛文麿という謎」。確かに近衛文麿という人物は非常に不思議というか、色々問題があった人物だと思うんですけども、こちらで紹介されていた二重人格説、非常に説得力があって、これこそまさに日本の魂と、先程のお話にも通じるんですけど、日本の魂と社会主義。この間で揺れていた戦前のエリートの苦悩の象徴のように私は思えたんですけども。

江：そのとおりだと思います。

今：これが最終的に左翼および右翼の全体主義、そして革新官僚のコミンテルンに踊らされた敗戦革命論。日本に限らず戦争を起こさせて負けさせて混乱に乗じて革命を起こす。敗戦革命論の危険性を「近衛上奏文」で最終的には終戦の年に改心したと言ったら失礼なんですけど、最後にグッとまともな動きを近衛さんはするわけですよね。近衛上奏文を昭和天皇に提出するに至ったということが、色んなことを象徴しているなという感じがするんですけども。近衛文麿という人物について最後に簡単に先生のご評価というか、お考えを。

江：この本の中では井上日召（いのうえ・にっしょう）という戦前の日蓮宗のお坊さんで昭和維新運動をやった人がいるんですが、その井上日召という人が血盟団事件とかそういうことを起こした人間。その関係で連座して牢獄にも入れられたんですが、彼が牢獄から出てきた後、近衛さんと会って、近衛さんと意気投合して近衛さんの自宅に住み込んで近衛総理の指南役をやるんですね。この井上日召というのは日蓮主義者なんですけど、皇室とりわけ昭和天皇のお気持ちというものの、昭和天皇は「早く戦争を止めるべきだ」と。「このままだと戦争がずっと続いて国民が苦しむだけだ」ということを何とか近衛さん頑張って提言すべきだと言いつけた人が、この井上日召先生が戦後回想録で近衛文麿のことを書いているわけですね。そのことを紹介した。

近衛さんは昭和の時にいわゆる革新官僚という社会主義を信奉する人達と一緒にあって大政翼賛会を作ったり、上杉慎吉らと組んだ人なんですね。本人も社会主義にものすごいシンパシーがあって、やっぱり貧富の差というのは、貴族なので、貴族として貧しい人に対する共感があって、何とかしなきゃいけないという負い目からのあれですが、貧しい人をなんとかしなきゃいけないと社会主義にシンパを持つ。自分は華族の一員として、要するに皇室の側近であるという、この2つの考えで揺れ動きながら、皇室を支える日本を守りつつ、でも貧しい人を救う社会主義も必要じゃないかと。この2つで揺れ動いた人が近衛さん。だけど社会主義の人をいっぱい活用したという意味では、近衛さんはコミンテルンのスパイじゃないかと言う風に言う人もいるんですね。そういう側面は、僕はあるような気もするんですが、でも近衛さん自身は皇室を中心とした日本を守らなきゃいけないという気持ちもあって、自分達が付き合っていた社会主義のメンバーが実はコミンテルンのスパイであることを理解して、自分は貧民救済のために社会主義者と付き合っていたのに、彼らが実はコミンテルンのスパイだったということを気付いて、後で。

25:15

彼ら社会主義者を放置しておくとも日本は戦争を長期化させられて、日本はソ連によって滅ぼされて共産主義の国になりかねないということで、昭和20年に、昭和天皇に近衛上奏文を出して、要はこのままだと官僚や軍の中に要るコミンテルンのスパイによって日本は滅ぼされるから、早く戦争を止めましょうという提案をしたと。この提案をする段取りをしたのが吉田茂なんですね。後の総理大臣。だからこの吉田茂も含めたいいわゆる保守自由主義、オールド・リベラリストとも言いますが、彼らと一緒にあって最後は近衛さんは動いた。ただ近衛さん自身は華族のおぼっちゃんなので騙されやすい。

今：ものすごくお人好しだった。

江：お人好しだけど、お人好しがゆえに色んな人を受け入れることもできる。

今：ものすごく嘘をつかない人であったと。

江：という意味で非常にいい人で、政治の世界というのはそういう懐が深い人ってどっ

ちかという、お人好しが多いんですね。そういう人というのは右左関係なく付き合っちゃうんですよ。付き合っちゃうし、「貧しい人を何とかしましょう」と言われると、「ああそうだよね」って思っちゃうんですよ。だからそういう人だったと、近衛さんは。問題は社会主義というものの恐ろしさやコミンテルンの恐ろしさを近衛さんは理解できていなかったことが問題。

今：理解した時には遅かったというか。

江：遅かったという。それはやっぱり当時の学問の世界がそうってしまった。それはそうですね。だって美濃部先生、佐々木惣一博士みたいな、まともな保守自由主義者は昭和 10 年代には全部アカデミズムから追放されていたわけだから。だから近衛さんの周りには右翼全体主義か左翼の人ばかりで、まともな学者は近衛さんの周りにいなくなっちゃったわけですから。

今：近衛上奏文にもありますよね。左翼の危険性と、さらに軍の内部にいる右翼って、これ皮をむいたら左翼みたいなもんだということを書かれてますもんね。すごく重要なお指摘。

このテーマの最後に今のところでまた関連するんですけど、まさに近衛文麿の大政翼賛会、これはどちらかと言うと左翼の人からの方がより評判が悪いような気がするんですけど、そもそも大政翼賛会の背景に非常に社会主義的な思想の影響が見られると。さらに言えばコミンテルンの人民統一戦線という、とんでもないというか手段を選ばないというか、そういう思想があったというお指摘について教えていただけますでしょうか。

江：この大政翼賛会というのはご存じの通り、大正時代、大正デモクラシーと言って曲がりなりにも政党政治が成り立ったわけですが、政党政治をやっていた政治家が腐敗したりというのもあったし、やっぱり政治家達も自分の権力を握るために色んな右往左往をしていく。あと当時の政府が経済政策をミスる。国民経済がおかしくなっていく。そういう失政を繰り返したことで、既成政治家は信用できないという風な動きがあって、コミンテルン側も議会制民主主義を破壊して、全体主義国家にしていけば一気にプロレタリア独裁に移行できると。だから既成政党を潰せというコミンテルンのプロパガンダに右翼の政治家不信と財閥不信を持っている左翼が合同して作って、政党政治を解体したのが大政翼賛会という仕組みで、実はこれはコミンテルンが 1935 年ぐらいから、人

民統一戦線と言って、それまではコミンテルンは「共産主義者以外は敵だ」と言ってきたわけですね。

今：全て敵だと。

江：ところが、ソ連やドイツを潰すためには自由主義者だろうが、資本主義だろうが、社会民主主義だろうが全部味方にしようと言って、誰でもいいから付き合って、とにかく反日と反ドイツを叫ぶやつとは誰とでも手を結べというやり方に変えたんですね。

30:18

今：手段を選ばず。

江：選ばずに誰とでも付き合えと。

今：大転換ですよ。

江：大転換に基づいて、広く日本を潰すグループを作れというのをやったので、当時の社会主義者とその方針に基づいて既成政党とも組んで一緒になって大政翼賛会を作っていくみたいなことをやってしまった。だから大政翼賛会というのは、いわゆるナチスドイツに倣ったんだという言い方を戦後の歴史学者は言うわけですが、これは事実とは違うんで、もちろんナチスドイツのファシズムに倣ったところもあるんですが、同時に人民統一戦線というコミンテルンの戦略に乗ってできたところもあるわけで。ドイツファシズム、イタリアもですが、あれだけで大政翼賛会ができたという物の見方は事実と異なる。実際に当時労働運動をやっていた社会主義系の政党も喜んで大政翼賛会に協力したわけですから、その辺の歴史的な事実というのをも踏まえていたほうがいいよねと。戦前あたかも日本は天皇陛下万歳で右翼全体主義、右翼だけの国だったみたいな誤解をさせられていますが、戦前も明治以降から社会主義、進歩主義も含めた反体制左翼がエリートおよび官僚・軍の中にたくさんいて、マスコミにも。彼らが戦前の日本を動かしていたのであって、保守派が動かしたなんて誤解です。

今：そういうことですよ。

江：そんな保守派に力があつたなら、日本こんなデタラメになってません。

今：先生のご指摘をまとめると、コミンテルンにある種操られていた左翼の全体主義者がいます。確かにいました。非常に色んなことをやりました。だけどここだけじゃなくて、右側もまた全体主義でおっかないのがいたんだよと。これも大問題。この視点が抜け落ちてますよね、今やっぱり。左翼の全体主義がいて、右翼の全体主義もいるよと。最後に先生がおっしゃる保守自由主義は残念ながらあまり強くなかったということになるんですか。

江：そうです。その中で日本は混迷に混迷を重ねてきたというのが戦前からの歴史で、そういう中で五箇条の御誓文の万機公論に決すべしとか、自由主義というものや、自由主義経済というものを守りながら日本を立て直そうという明治の精神に戻ろうということを、昭和天皇さまは日本が戦争に負けた翌年の1月1日の年頭の詔書で敢えて、五箇条の御誓文というのを敢えて取り出されて、我が国はそこにもう一度立ち戻って、明治以来の日本の、もっと言えば聖徳太子以来の政治的伝統を取り戻していけば、日本は復活できるんだというメッセージをわざわざ昭和天皇さまは我々に送ってこられた。その意味を我々は重く受け止めるべきだと思うんですよね。

今：それではここから2つめのテーマとしまして、スパイ・謀略・インテリジェンスと我が国が進むべき方向について掘り下げてお話を伺って参りたいと思います。よろしくお願いいたします。まず元々コミンテルンの日本支部として誕生した日本共産党という政党についてお伺いいたします。戦前の各国の共産党というのは、全てコミンテルン、共産主義インターナショナルの指揮下に置かれ、暴力革命を目指す政党として非合法活動部門を抱えていたということになるんですけれども、現在も我が日本の日共、日本共産党の情報収集とか、そういった活動は健在であって、政府や議会の内部にもスパイや同調者のネットワークが存在しているとご指摘をされているところについてお伺いできますでしょうか。

35:01

江：まず基本的なことで言うと、日本共産党は暴力革命路線を明確に否定していますので、暴力革命を目指すという意味で言うと、非合法活動部門があるのかどうかというと、本人達はないと言っている。それが事実かどうかは、僕はクエスチョンがあるわけです。

が。

今：ありますとは言えないですね。

江：そういう風になっている。ただその上で情報収集や活動はやっているというのは、僕は事実だと思うのはなぜかと言うと、例えば今回森友・加計学園の問題ありましたが、加計学園の問題だって森友学園の問題だって最初にこの問題をワーストと言ったのはしんぶん赤旗なんです。しんぶん赤旗が文科省や財務省の連中たちと連携しながら、そういう情報を出してきているわけで。当然のことながら文科省や財務省の中に彼らと連携をする人達がいる。いるから、しんぶん赤旗はあれだけのスクープ記事を次々と出せるわけで。第一次安倍政権の時だって、いわゆる年金問題で潰されたわけですが、年金問題のああいふ「消えた年金」とかのデータは、社会保険庁が持っているわけですが、社会保険庁はそういうのはないと言っていたにも関わらず、裏からそういうデータが出てきた。ということは社会保険庁の中に共産党の活動と連携する人達がいる。別にスパイと言うべきなのかという微妙かもしれませんが、少なくとも協力者のネットワークがあって、議会や官僚達の中に。彼らが日本共産党に情報提供をしながら、現に与党自民党を追い詰めるような報道をやっていて、しんぶん赤旗が書き、それを日本の新聞社が後追いし、日本の新聞社が後追いした後、それを踏まえてテレビ局は騒ぎ立てるといふ構図は一貫して変わってないわけで。この変わってない構図を見た時に、日本の与党打倒というか、安倍打倒報道というものの司令塔がどこにあるのかということを考えれば、共産党さんの影響力というか、ネットワークというものは素晴らしいものがあると、僕は思わざるを得ないわけです。

今：スパイというとちょっと刺激的すぎるかもしれないんですが、やっぱり情報提供者というか先生がおっしゃったように同調者。左翼っぽく言うとシンパみたいなものが確かに色んな組織にいることは間違いないだろうと。

江：変な話をしますが、例えば日本共産党は代々木にビルがあって、政党職員が何人いるのかというのは、一説によると大体 2000 人ぐらいは最低いるだろうと思われている。自民党本部党職員って 100 名ぐらい。与党自民党の 20 倍の党職員が情報収集・分析をやっているわけで、マンパワーだけで言ったら自民党の 10 倍以上の力があるわけです。それぐらい情報収集・分析・プロパガンダにエネルギーをかけているわけで、

自民党の比ではない。

今：そこはやっぱり伝統的にそういうインフォメーション、インテリジェンス、プロパガンダ。これについての重み付けというか、そこに注力していることは伝統的に変わってない。

江：注力をしてやっていますし、我々は近代政党、組織政党という言い方もするんですが、近代政党、組織政党としての力を持っているのは我が国では共産党と公明党の2つしかない。自民党は例えば選挙の広報活動ひとつ取ったって、2つの広告代理店がありますが、その2つの広告代理店に丸投げをしているわけで。要するに自分たちの政党の広報や、そういうものを一民間広告代理店に丸投げする政党って、それ政党と呼ぶのかという話で。

今：確かに本来はそうですね。

江：僕からすれば共産党が異常なんじゃなくて、共産党・公明党以外が異常なんです。まともな政党ではないと僕は思わざるを得ない。これはアメリカの共和党だって民主党だって、ドイツのキリスト教民主党だって、イギリスの労働党だって保守党だって、シンクタンクと広報部門を持って、メディアに頼らずに自分達でそれだけの広報や分析をやる能力を持ち、官僚に対抗する政策集団を持っていますので。

40:12

それがないのは我が国の自民党ぐらいで、民進党とかぐらいであって。だから繰り返しますが、それぐらい日本の政治情勢というのは共産党が突出しているんじゃないくて、他がダメなだけです。

今：よくわかりました。私の中でいわゆる共産党というもののとの出会いが、30年以上前なんですけど、立花隆氏の『日本共産党の研究』という本を読んだのが多分最初じゃないかと思うんですけど、非常にその時には衝撃的な本だったんですけども、内容的には戦前の成り立ちから昔の共産党のコミンテルンに行って、資金をもらってきて、共産党を作ってみたいな、徳田球一だとか、いくつか大きい名前があると思うんですけども。ああいった人々が結構いい加減なことをやっていて、あんまり盛り上がらないで、インテリはある程度オルグするんだけど、全く大衆運動には拡がらないとか割

合間抜けなことをやっている間に最後は治安維持法で特高に潰されてしまいましたという話が大部分なんですね。やっぱりそのイメージが大きくて、その後に思想犯として捕まっていた人達を占領期に GHQ（連合国軍総司令部）が釈放したりとか、そういったことで戦後そういう工作というのが一気に強まったイメージを勝手に持っていたんですね、私も。ところが、ご著作でもご指摘になっているように、全然そんなことはなくて。じゃあ日本共産党という組織だけを切り取ったら、そんなに大きなムーブメントでは無かったかもしれないけれども、現実的にはものすごく大きな影響を与えるに至ったと。それを称して先生はよく言われるスパイ天国、日本は戦前からスパイ天国だったんだというご主張について教えていただけますでしょうか。

江：日本は前回も言ったんですが、大正時代から日本の東大も含めた帝国大学はいわゆる社会主義や進歩主義の思想が全盛時代で、それに基づいて社会主義や進歩主義、要するに伝統破壊を考える人達が官僚や軍やアカデミズムやマスコミに全部入っていったわけで。彼らは事実上共産党のシンパではあるんですが、共産党シンパだけでも彼らは有能なので共産党には入れないわけです。なんでかという、日本共産党はあくまでもフロント、デコイ（囷）なので。あくまでもあれはデコイで。だって言い方は悪いんですが、今の日本共産党のトップの方を見て、怖いと思いますか。

今：その感覚は多分ほとんどの人にないでしょね。

江：ないでしょうね。そうやって安心させることも 1 つのプロパガンダ。要は出てくる人というのはあくまでもデコイであって、要するに見せ玉であって、本当に怖い集団というのは絶対表に出てこないんです。その怖い集団とは何かと言うと、はっきり言えば官邸や霞が関の中で愛国的なこと、もしくは真面目な官僚としてやっている連中が山ほどいて、彼らこそが本丸なので。彼らは絶対日本共産党とは手を結ばない。裏のネットワークを作りながら、はっきり言えば北京やアメリカのリベラルの人と手を組みながら色んな仕事をやっているわけで。国連とか。日本共産党はあくまでも出先なので、それは戦前から変わらない。だから代々木は、あくまでも繰り返しますけれども、見せ玉なので。見せ玉でさえ自民党の 20 倍の力がありますけどね。

今：水面下というか、見えない部分により恐ろしいものが……、

45:00

江：そういう人達のネットワークをきちんと作りながらやっていて、なおかつ誤解ないように言うと、他の政党は基本的には国民政党なので、自分の国だけで完結するんです。だから基本的には自民党は自民党だけで完結する。民主党は民主党だけで完結する。共産党だけは世界のネットワークがあるんです。この世界のネットワークと連携しながら、国連を含めて、国際政治と連動しながら日本のメディアや政治に圧力を掛けるということができる力を持っているのが、この共産党およびそのシンパ達なので、その力というものを、僕は繰り返すけれども、侮るべきではないと思います。

今：やっぱり先程の戦前の思想状況の中で、元々は貧民救済とか労働者の問題のために社会主義に行ってしまった人が多かったのと一緒に、共産主義というものが現実起こした問題点よりも、最初理想論としてそっちに引っ張られてしまう人が非常に多くて、いまだにそういうところありますよね。共産党に。

江：だからよく、なんで共産主義とか社会主義に皆賛成するんだ、みたいなことを言うんですが、残念ながら、アメリカ帝国主義という言い方をしているのかどうかわかりませんが、現実にはアメリカも世界各地で紛争を起こして、非常に残虐なことをやっているのも事実だし、日本の資本主義社会の中で金銭的に恵まれなくて苦しんでいる人がいるのも、それは他の国に比べれば圧倒的にマシだと思いますが、それでもそういう人がいるのも事実なわけです。そういう方々を救うためには、やっぱり今の資本主義や自由主義じゃダメで、社会主義で行くべきだという風に思われて、思い込んでしまっている人がやっぱり一定数いることも事実。彼らは社会主義、共産主義の罪悪よりもアメリカ資本主義や、そういうものの罪悪の方がより大きいと思っているので、だからどうしても反米、反資本主義で行くべきだと思っている。

今：解決策が先程の共産主義、私有財産の否定。そういったところとしての社会主義の体制しかないという。

江：1つ思い込んでしまうと、そういう悪質な1つの宗教という用語弊があるんですが、イデオロギーの恐ろしさというのはそういうのがあると思いますよね。

今：そうですね、共産党はやっぱりよく似ていますよね。宗教組織というか、ちょっと

非常に例えは悪いんですけども、カトリックの教会みたいな。要は分派を絶対に許さない。異端として潰してしまうという意味では、共産党というのは最も民主的じゃない組織だと思うんですけど。

江：そういうのはあると思いますね。

今：統制というか、じゃあ新しいものが出てきた時に解釈権を持っているのはトップだけなわけですよね。言うことを聞くか聞かないかだけで、議論は存在しない。

江：プロレタリアと独裁で、全ての決定権者は共産党のトップにあるというのがマルクス・レーニン主義の基本的な考え方ですので、民主独裁という言い方も彼らはするわけですが、そういう言論の自由を基本的に認めない考えなので。

今：民主集中制とかすごい言葉ですよね。

江：そういう言い方になりますね。だから日本共産党さんはいまだに党の代表は選挙で選ばないですし。

今：そうですね。それが立憲主義だの民主主義を守れ、みたいなことを主張しているんですよね。不思議ですよね。それではまたコミンテルンの謀略というものが先の大戦に果たした役割。もちろんそれが全てでないと、非常に大きなものがあったと思うんですけども。それにしてやられた日本の自滅。これを先生は強調されていると思うんですけども、この指摘は非常に重要だと思います。

50:00

この点について改めて簡単にお聞かせいただけますでしょうか。

江：前回いわゆる右翼全体主義の言論弾圧の話をしたので、もう1つの話として経済政策の失敗という問題があるんですよね。これは何かというと、昭和恐慌の時に、あれはデフレだったわけですね。デフレというのは通貨量の不足ということから来ているわけですね、需要に対する。

今：今と同じような問題が存在していた。

江：そうです。通貨量の不足に対して本来なら金融緩和と言って、日銀とかも含めたところが通貨量を増やす政策をすることでデフレを改善するというやり方をすべきだったのに、戦前の日本政府はデフレ政策に対して、また緊縮財政。つまり財政を縮小すると共に通貨量も減らす政策をしてしまった。その結果ますますデフレが悪化して資金がショートして企業が次々と倒産する。資金不足になっていくという形で経済的にもものすごい深刻なダメージを受けて、その結果、だから東北の農村とかで子供達を女郎に売る。要するに娘が売春で支えなきゃいけなかったりという悲劇が生まれたわけで。

この経済政策の失敗がやっぱりあったので、共産党が言う、資本主義はダメだとか、政治家は信用できないとか、財閥は自分達のことしか考えてないとか、そういう理論が説得力を持っちゃった。要は共産党やコミンテルンのプロパガンダがうまくいったんじゃないくて、共産党やコミンテルンのプロパガンダに説得力を持たせたのは政府の経済政策の失敗なんです。逆なんです。プロパガンダがうまくいったんじゃないんです。政府の経済政策が間違えたことが、共産党のプロパガンダに説得力を持たせたのであって、政府が経済政策をミスらなければ、共産党や共産党のシンパはあんなに戦前大きな力を持つことはなかったという意味では、やっぱりマクロ経済、金融政策も含めた、経済政策というものがいかに大事なのかということを、やっぱり我々はきちんと理解しなきゃいけない。でもじゃあそれを理解しているのかというと、例えば今の第二次安倍政権で、アベノミクスで金融緩和を一所懸命やっていて、安倍さんの金融緩和や GPIF の年金運用のことについて、これが大事だと理解している保守派の人がどれだけいるか。ほとんどいないです。なんで憲法をやらないんだとか、何で防衛に対することをもっとやらないんだということばかりを言って、日銀の金融緩和の問題やマクロ経済の問題や、そういうことが実は日本を立て直す上でもものすごく大事なんだということを理解できていないという意味では、今も僕は基本的に変わっていないと思っているし。

今：そこに既視感があるわけですね。

江：あります。敢えて書いたのは、経済政策をミスると安全保障も国防も外交も無茶苦茶になるんだよと。そこをちゃんと理解しなければ日本を守れないということ、こちら側の陣営の人ももう少しちゃんと見ましょうよと。それを見ないと。だから安倍政権は経済政策ばかりやって憲法の問題をやらないのはけしからんという人がいっぱい

いるので、ああと思って。

今：確かに経済政策の失敗によって、とんでもない困窮者が増えて社会不安が起きて、政治家不信になって、議会不信になって、もちろんその流れがある中で、最後の方の政治家不信だとか、議会不信だとかいうところにはコミンテルンのプロパガンダがスッと入るわけですね。

江：そうです。だから繰り返しますが、コミンテルンのプロパガンダが成功したんじゃないくて、日本の政府の経済政策が失敗したから彼らの議論が良く見えた。

今：付け入る隙を作ってしまったと。その原因は失政である。

江：そうです。だから、その失政をちゃんと見なきゃいけないのであって、だから僕は例えば共産党の議論というものを叩く暇があるならば、今回も森友・加計学園の問題。安倍政権、安倍倒閣報道が起こっている。

55:00

それに対して倒閣報道けしからんという暇があるならば、消費税を上げて個人消費が伸びなくて、地方にアベノミクスの成果が行き渡ってない現状があるんだから、この消費税を8%に上げたことのミスをきちんと是正して減税措置をして、地方にもっと資金が行き渡るように、中小企業が設備投資に踏み切ることができるような環境整備を与党がやるのが大事であって、マスコミ叩きをしている場合かよというのが、僕の基本的な問題意識で。それは、そういう歴史をちゃんと学びましょうよと。だから僕は保守の経済オンチが国を滅ぼすということを書いているのはそういう意味で。

今：そもそも昔それでとんでもない危機のきっかけになっていたでしょうと。

江：そうです。戦前それでおかしくなったんじゃないですかと。

今：そこからだという話ですよ。今の環境はと言ったら、同じようなことになっていると。

江：同じような状況がずっとあるわけ。だから繰り返しますが、格差問題とか何とかって言っても、それら問題は20年間デフレで自民党は金融政策を失敗したのが問題なんだから、それを反省した安倍政権は金融緩和に踏み切っている。そこをちゃんと理解する目で政治というのは、経済の問題や軍事の問題、外交の問題、社会政策の問題。トータルに見るべき。トータルに見ずに、憲法をちゃんとやっていないからけしからんとか、そういう個別のテーマだけで物を言うような、言っちゃ悪いけれども視野の狭い議論は止めましょうと。本当に止めましょう。

今：森友の話は私も本当に問題があったならあったで、それは警察なり検察にでも捜査をさせればいい話で、あれだけ延々と国会でやったという事自体が恐ろしい。

江：はっきり言っておきますけれども森友・加計学園の問題について、あればっかり国会でやってたという事態もプロパガンダ。別に実は国会では森友・加計学園の問題だけやってるなんて、そんな愚かなことはしてなくて。

今：本当はそうですね。

江：ちゃんと社会保障の問題から、働き方改革から金融緩和の問題から、TPPや農業問題、様々な議論をきちんとやっているんです。でもそれを報じないで、森友・加計学園だけやっているような朝日新聞を含めた報道にこちら側の人が踊らされているだけであって、踊らされてどうすると、僕からすると。というのが僕の捉え方で、残念ながらメディアはそういう言論操作をする集団なんです。

今：確かに、そうですね。

江：それに対してダメといったって、彼らはするんです。

今：そういう性質の……、

江：そういう集団であることを前提に、じゃあそれに対抗するためにはそういうのに踊らされない、ちゃんとした情報を取りましょうよということと、やはり彼らがそういう言論操作をすることなんだからということを頭に置いて、メディアの報道を見るという、

リテラシーと我々は言うんですが、リテラシーを身につけることが大事ですよ。だからこういう番組を作っているわけでしょうけれども。

今：そうです。それではちょっとゾルゲ事件のお話に移りたいと思いますけれども、非常に有名な、首謀者の1人として逮捕された尾崎秀実（おざき・ほつみ）。朝日新聞の記者でもあった人ですね。大東亜戦争開戦直前まで近衛文麿政権のブレーンとして活動して、支那事変の長期化に非常に大きな影響を与えたと言われているわけですが、すごく重要な視点だと思うのが、もちろん連座して、逮捕されスパイとして処刑されたという歴史的事実があるわけですので、やっぱり私も「売国奴」というイメージをずっと持ってたんですね。ただ、やっぱり先程の単純な図式で、じゃあ左翼は悪だとか、反国家だとか、そういう単純な話では本来はなくて、現実には元々愛国者であったからこそ、そちらの方に傾倒していったというご指摘についてお聞かせいただけますでしょうか。

1:00:07

江：尾崎達も含めて、やっぱり彼らは当時の経済政策の失敗で実際に農村の女の子達が売春に売られたりとかの一方で、新聞記者なので財界人と付き合うわけです。財界人達は料亭でうまいもの食ってるわけですね。それだけ見ると、やっぱりこれ間違ってるよねと普通思うんですよ。

今：世の中の矛盾をつぶさにみているという。

江：それに対してやはり社会主義・共産主義の考え方と言ったら、そういう意味で財界人達の横暴とか、そういうものを是正する仕組みとして社会主義・共産主義という考え方があると共鳴を覚えてしまった。尾崎自身はソ連が当時一党独裁で異論を認めず、人を殺しまくっていたという風なことについては、ソ連に行ったことがないので、そういう噂は聞いていたけれども、それは資本主義のプロパガンダだと思っていた。だからそれよりも実際に帝国主義という名の資本主義者達の横暴というものを是正することが大事だという風に思ってしまった。それを思ってしまったこと自体は愛国心から来ているわけで、決して彼は、自分は国を売るためじゃなくて、日本の貧民達を含め、より良い日本にするためにソ連と協力していたんだというのが彼の言っていることで、国を滅ぼすためじゃなくて貧しい人を助けていく日本にしたいことから始まったんだと。もち

ろん尾崎自身が性格的に色々問題はあるようで、要はエリート特有の「俺は正しいことをやってあげているんだ」みたいな、要するにエリート特有のものもあったと僕は思うので、そこはちゃんと見なきゃいけないんですが、ただ一方で売国奴とレッテルを貼ってしまったら、物事は見えなくなってしまうよね、残念ながら社会主義とか、そういうものにシンパシーを持つ人に売国奴だとレッテルを貼って物事が解決するのか。しません。僕が大事に思っているのは、物事を解決して日本をより良くしていくことが大事であって、尾崎達を売国奴だという風にレッテルを貼ってまともな歴史認識が生まれると思ったことはないのです。

今：だからその表層に表れて、史実に残ったことだけを見て、そこで止まっちゃダメだということですよね。そこは非常に重要で、私もちょっと目が覚めた思いだったんですけども。確かにスパイなので戦前であれば処刑されてもしょうがなかったと思うんですけども、だからと言って別に絶対悪で日本を滅ぼすつもりでやっていたわけでもないということですよ。

江：言い方は悪いですけども、日本共産党に関わっている人達で、戦争法案反対とデモをやっている人達、70代80代のおじいちゃんおばあちゃんなんかが多分そういう革命のためにお金を全部使ってきているんでしょう。服もちゃんとした服じゃなくて、小汚い服を着て一所懸命声を枯らして戦争法案反対ってやっているわけですよ。彼らは売国奴なのか。そうじゃなくて、本当に日本を戦争に巻き込まないために、こうすべきだと思いこんでしまっている。

今：正しいと思ってやっているわけですよ。

江：「お前たちは売国奴だからけしからん」と言ってもそういう声は届かないのであって、本当に戦争を避けるためにどうしたらいいのかということと一緒に考えていくことが、僕は大事だと思っているんですね。誤解ないように言っておくと、僕は共産主義の批判をしますけれども、僕の家の中の自分の仕事部屋があるんですが、家の書棚がわーっとありますけど、半分以上共産主義、スターリン、レーニン、（ヘルベルト・）マルクーゼです。

今：それが本来重要ですよ。

江：要は、僕は「共産主義は悪だ」というレッテルを貼るために勉強しているんじゃないくて、共産主義とか、そういうものがこれだけ世界で発展しているのはなぜなのかを、きちんと正確に理解することは大事だと思っているのであって、彼らを悪だとレッテルを貼ることを大事だと思ったことはないの。

1:05:15

今：なので先生がやっぱり強くご主張されている右翼全体主義の勢力による言論弾圧。気に入らないとか、敵対する思想だからといって排除して、ないことにしてしまうのは、決して問題の解決にはならない。

江：ならないし、だって「敵を知り己を知れば百戦危うからず」で、相手のことを正確に理解しようとしなければ、物事の解決はできないわけで、その基本に立ち戻りましょう。僕は一貫しているんですけどね。アメリカだって、アメリカが敵だ味方じゃなくて、アメリカの中のどういう勢力が何を言っていて、どういう動き方をしているかを正確に調査し、分析することが大事であって。

今：そうですね。

江：アメリカけしからんと言ったところで、物事は解決するのかよ。僕は子供達にいつも言うのは、サッカーで相手のチームはけしからん、あいつら馬鹿だと言って試合に勝てるようになるのか。

今：確かにそれは分かりやすいですね。

江：相手のチームはどのようなプレイヤーがいて、どういう作戦で、あの監督はどのような攻撃の仕方をするかを綿密に分析して、その対応策を考えて初めてサッカーは勝てるようになるのであって。相手のチームのあいつは馬鹿だ、あのエースストライカーは女癖が悪くてひどい奴だ。あいつは人間的に問題があると言って、相手のプレイヤーの悪口を言って勝てるようになるのか。そんなことは有り得ない。

今：先程の政治のことに関する報道だとか、あるいは野党や、あるいは朝日新聞を叩い

て廃刊に追い込むことが、何かの目的に適うのかということですよ。

江：朝日新聞は一所懸命、敵方の情報を流してくれているんだから、こんな情報源としてありがたいものはない。

今：それをきちんとウォッチして分析を……、

江：させてもらう材料を彼らはいっぱいくれるわけで、もう感謝感激だと、僕は。

今：この視点がやっぱり重要ですね。

江：問題はその上で朝日新聞のやっていることも含めた色々なメディアは、非常に意図的な言論操作やプロパガンダをやっているんだから、それを鵜呑みにする愚かさはいけないよと。我々は賢くなりましょうということを国民の側に伝えるという意味で、僕は、メディア批判は賛成です。誤解ないように。

今：そうですね。批判は大事ですね。

動画3 「日本のインテリジェンス力強化に何が必要か」

00:00

今：それでは今の尾崎の話ともちょっと関連するんですけども、いわゆる情報提供者とかスパイとしてリクルートされる可能性がある人物の要因として、最も危険性が高い人物像についてのお考えをお伺いしたいんですけども。これはわかりやすい、いわゆる「ハニートラップ」とか、そのような脅迫とか、あるいは金銭的な見返り、こうしたものは実は主ではないということになるんですかね。

江：これは第二次安倍政権になって、対外情報機関を作らないといけないという話が出てきたわけですね。対外情報機関を作らないといけないという関係の中で、アメリカのCIA（中央情報局）の関係者達が日本に頻繁にやってきて、日本の対外情報機関を作るのであれば我々協力しますということで、OBの連中が俺達をアドバイザー、もしくはプランナーとして雇えという売り込みを永田町で頻繁にやってるわけですね。その頻繁にやっている永田町の議員会館とかで勉強会が超党派でしょっちゅう行われていまして、彼らの勉強会で僕も永田町にいたので、そういう勉強会も頻繁に出たんですが。彼らがいつも言っているのは、スパイになりやすい連中というのは、女や金よりも「不遇感」。要するに俺はこんなに能力があるのに、政府は俺を大事にしてくれない。

今：正しく評価されていない。

江：評価されていない。そういう人間が、あなたの国の政府はちゃんと扱っていないにも関わらず、我々はあなたの力を評価していますと。例えば日中友好のために、あなたの力を貸してくださいという風に言われて、日本と中国の友好のためにあなたの力が必要なんですというような形で言われて、中国の情報収集に協力を喜んで人がいっぱい出てくる。そういう形で結果的にスパイにされていくというか、情報提供者にされていく人。これはアメリカのCIAも同じことをやっているわけで、日米関係

を強化するために、あなたの力をお貸しくださいと。今の政府はあなたの力を理解できていませんと言って、CIA はリクルートをしながら情報提供者を作っていく。これはどこでも情報機関のやっている基本的なリクルートの仕方です。

今：一般的には週刊誌なんかでも、例えば結構前ですけどハニートラップなんて言葉が流行ったりとか、あるいはスパイ映画の影響もあるのかもしれませんが、人間の動機というのは、何らかの経済的な金銭的な利益か、あるいは弱みを握られて脅迫されるかというアタマがやっぱり大きい人が、強い人が多いと思うんですよね。ただ現実にはそうじゃないと。

江：現実にはそういうのもあると思うんですが、要は金と女で強請られる人というのは積極的に動かないんです。

今：使命感も何もないわけですから。

江：積極的に動かない人はあまり役に立たない。使命感を持って一緒にやってくれる人間の方が情報のレベルも上がるし、正確度も高い。使命感を持ってやってくれる情報提供者の方がよっぽどありがたいので。

今：まさに非常に先生のご指摘で重要なのは不遇であると。自分が正当に遇されていないという不満がある。ということは有能な人物であって、その有能な人物の不遇感につけこんで、あなたは正しい。だからあなたの国をよくするために手伝ってくださいと言われて、もちろん不遇感のあるエリートなんだから情報提供者としては最高に優秀なわけですよね。

江：優秀です。そういう人達の方が役に立つので。もちろん本当の意味での我が国の政治のトップにいる人達をハニートラップにかけて、いざというときに脅かす。瞬間的にそういう決断をやらせるという意味でのハニートラップや資金も有効なんですよ。

05:00

だから僕はハニートラップや資金がないと言っているんじゃないじゃなくて、それはあくまでも瞬間でしか使えない。実際継続的に情報提供を含めたスパイ工作をやろうと思うのであれば、不遇感のある能力のある人間をどうピックアップするかが大事というのがインテリジェンスをやっている人間の常識です。

今：これ結構そういう視点をお持ちじゃない方の方が大多数だと思うんですね。

江：だからそれはやっぱり申し訳ないけど、プロの世界の人達と付き合ったことがないからでしょう。

今：そうです。言われてみると、すごくロジカルに、ああそう言われればそうだなとなると思うんですけども、多分聞かなきゃわからないですね。

江：普段、だってそういう人達と付き合わないもんね。普通の人は付き合わないですからね。

今：そういうことですね。なので、例えばカウンター・インテリジェンス、防諜の面からすれば、これは当然有能な人材に不遇な環境を与えてはいけないということにもなるわけですね。

江：そこをちゃんと見ておかないといけないし、有能な奴で不遇感を持っている人ほど怖いので、そこをちゃんと見ておかないと本当に大変なことになります。

今：具体的にありそうというか、常識だとおっしゃるぐらいなんで、非常にどこの国でもよくある話なんだろうなと思うんですけど、そこは実際には付け入れられる穴が開いているのと同じことですね。

江：そういう意味で言うと、繰り返しますが、五箇条の御誓文以来の、力ある人達をきちんと登用しながら、皆の力で政治を良くしていくという基本原則を繰り返し繰り返し立ち戻っていくことが大事なんですね。

今：そうですね。結局、論敵や何かを排除しても……

江：排除するということは、その人達を向こうに追いやるだけなので。

今：これが非常に重要ですね。

江：これはもっと言うと、第二次安倍政権になって、誰とは言わないけれども、テレビの中で安倍政権を批判するジャーナリストがいっぱいいるわけですが、ある人は安倍政権の仇みたいな人がいるんですが、その名前を言うと差し障りがあるんですけど、僕はその人とは仲良かったんですが、彼は第二次安倍政権になればすぐに自分は官邸に呼ばれて、官邸の相談役にさせてもらえると思っていたにも関わらず、何の声も俺にかけてこないという逆恨みから安倍叩きを始めたので、要はそういう世界っていっぱいあるんです。

今：そうですね。結構重要なことは、きっかけというか、根本は割合些細なことかもしれないんだけど、それが招く結果という、ここだけを見ちゃうと、ここは全くわからないというのもありますよね。

江：そうです。人心収攬術ともいうんですが、そういうものも常に頭に起きながら政治も含めてやらないといけないし、多分大企業だって有能な技術者達に不遇感を持たせると、彼らはその技術を持ってライバル会社に身を売っていくわけで。

今：それが、多分デフレが続いている中で日本で繰り返されていたことのような気が

するんですけど。

江：だって日本の優秀な技術者が残念ながら週末は韓国と中国に行っていたわけで。それはそういう風な形で追いやったわけですね。

今：そうですね。すごくそこにも全く同じ話として通じるわけですね。

江：そういう目配りをしていくということが大事であって、いわゆるスパイの話をするとすぐ「スパイ防止法」の話を皆されるんですが、スパイ防止法も必要ですけども、僕は別にいらんなんて言ってないんです。ただスパイ防止法で対応できるのは、ごくわずかであって、実はそれ以上にそういう目配り、気配りも含めた、何でこういうスパイとかそういう人達が生まれるのかという仕組みを理解することの方が実はもっと大事なんですね。そこも理解してもらいたいと思って、繰り返しスパイ防止法というけれども、それは大事なんです。僕は必要だと思います。

今：それができたら万全なのかというと、全然そんなことはないということが重要なんですよね。

10:03

江：そんなことはないので、そこを理解しましょうという話ですね。

今：そうですね。これすごく面白いというか、先生がご紹介されている FBI の初代の長官だったジョン・エドガー・フーバーの、共産主義運動に関与する人物の5つの分類。これ非常に面白いと思うんですけども。1つめが公然の黨員、2つめが非公然の黨員、3つめがフェロートラベラーズ（同伴者）、4つめがオポチュニスト（機会主義者）、最後に5番デュープス（騙されやすい人）。非常に重要だと思うんですけども。特に後ろに行くほど実は重要じゃないかと思うんですけども。これについて簡単にそれぞれの問題点というか、内容について。

江：これは何度も言っているように、共産党というか、共産主義者イコール共産党員で、彼らは敵だ。共産党に賛同している人間も共産主義者で敵だという風なレッテルを貼っていくと、物事は見えなくなるんですね。例えば戦前の朝日新聞の尾崎、彼は日本共産党とつながっていたのか。つながっていないわけです。全く関係ないわけです。

今：尾崎は確か検挙されるまで共産主義者なんて誰も思ってなかった。

江：思ってなかった。要は共産党というところは、本当に重要な人間は共産党員にしないんです。

今：表に見える部分には。

江：しないんです。秘密工作専門にしていくという意味で、だからエドガー・フーバーというこのFBIの初代長官だった人間は共産党を取り締まる上で、全部共産党員だと、共産党員だからダメだという議論はダメだと。共産主義に協力している人間でも共産党と関係ない奴も山ほどいて、そういうことをちゃんと見ないと取締まりができないんだという意味で5つの分類にして。公然の党員と非公然の党員。非公然は秘密党員ですね。フェロートラベラーズはどういうことかということ、戦争法案反対と言ったのに対して、共産党が、それに対して一緒にそうだと言って戦争法案の反対を叫ぶ人達。この人達は共産党員ではないけれども、共産党の主張に賛同して動いちゃう人達。この人達をフェロートラベラーズという言い方をするんですね。4番目のオポチュニストというのは、これは、要は共産党でもないし、共産主義者でもないんだけど、共産党と手を組んじゃう人。これはどういう方かということ、例えば民共合作と言って昨年まで民進党と共産党が選挙協力をやっていた、共産党の票が欲しくて、民進党の人達は共産党と組んだわけですね。民進党の人は共産主義者でも共産党のシンパでもないんだけど、票が欲しいから。

今：思想でも政策でも関係ない。

江：関係ないけど、共産党と組む人達はオポチュニスト。機会主義者と呼ぶんですね。彼らは、お前達共産党だろと言われても、俺達共産党じゃないし。最後のデュープスというのは、一応騙されやすい人、もしくは、

今：もっと刺激的な……、

江：「間抜け」とかいう言い方もするんですが。これはどういう人達かと言うと、経団連は敵だ、経済界なんて信用できるかみたいなことを共産党は一所懸命言うわけですね。それに呼応して、保守側の人も経団連は敵だとか言っちゃうわけです。

今：実は一番まずいというか。

江：そうです。本人達は共産党に利する行為をやっているとは何も思っていない。本人達は国益を守っているつもりだけど、結果的に共産党の主張に賛同し、共産党のやっていることを支援することをやってしまっている人達のことをデュープスと言う。このデュープスというのが厄介。

今：そうですね。結局何らかの意図がある謀略に、最終的に乗かってしまう提灯みたいな感じですね。

15:01

江：そうです。だから例えば政治家は信用できないとか言うのと、そうだ！政治家なんか信用できるかと保守側が言って、だからもう民主主義はダメなので、やっぱり独裁で行くしかないんじゃないとかいう訳のわからないことを口走る保守派の人がいたり、あと政治家は全部無能で、それに騙されている国民も騙されて、B層*みたいな形で、疑似アナーキズムで、政治家なんか皆信用できないし、馬鹿だし、安倍もきちが

いだみたいなことを言うような自称評論家の人がいっぱいいるわけですね。彼らはそうやってアナーキズムや資本主義、自由主義、議会制民主主義の解体を叫んで、共産党のプロパガンダに協力をする。でも言っていることは、自分は保守だということ。自分達は何をやっているかを理解できない。かなり申し訳ないけれども、状況分析の力がない人達のことをオポチュニストと言います。

* 郵政民営化の広報企画において、広告代理店が小泉政権の主な支持基盤として想定した「具体的なことはよくわからないが小泉純一郎のキャラクターを支持する」層

今：なかなかこれらの考え方、それらもまたご説明いただけると段階的にそうだなという感じなんですけど、この後ろの方の人々、要は言ってみればプロパガンダのターゲットでもあるわけですね。結果としては、本人は騙されている自覚もなく、結果的には意図された方向に協力してしまっているという、一番たちが悪いと言ったら気の毒なんですけど。一番まずいことなんです。

江：だからお前たちデューブすだ、じゃなくて、これは自分自身の問題で、自分がやっている言論や活動がそうやって結果的にコントロールされているんじゃないかということを常に言いながら自分の言論活動を検証することが大事という意味であって、僕でさえ既に自分はデューブスにさせられているんじゃないのか。フェロートラベラーズにさせられているんじゃないのかということを常に客観的に見ながら自分を見ながら自分の検証することが大事だという意味で、僕は、これは他人事で言っているんじゃないんです。自分達の議論というのがそうやってされないようにしておく必要がある。そういう巧妙なプロパガンダや、人を動かす工作に長けているのが彼らコミンテルンとその継承者達なので、そこを理解しようと言っているんですね。非常にクレバーに我々はならなきゃいけない。

今：これもなかなか教えていただかないと気付けない、とても重要な視点だと思います。

江：だから僕は日本共産党の源流の立花先生達はそういう風な議論の枠組みを使わず

に日本共産党の研究をやっているでしょう。どっちなんだろうと思って。

今：そうですね。わからない。

江：僕からすれば、立花先生は本当のところは日本共産党の研究をやることによって、本当の敵を隠蔽する工作をやっているんじゃないのと言われても仕方ないと思うんです。

今：さっき私も申し上げたように、割合コロッと断片的な見方に引きずられていた部分があったのかなと思ったんですけどね。

江：もちろん立花先生はそういうつもりじゃないと思いますが、でも結果的に日本共産党はそんな怖くない存在だというプロパガンダをしてしまっているわけで。

今：私はそんな印象でした。

江：その結果、共産党やその関係者に対する宣伝工作やインテリジェンス秘密工作に対する警戒心を解くことになってしまっている。それは、このフーバーで言えばデュープスもしくはフェロートラベラーズと認定されても仕方ない。だからそれぐらい我々言論人というのは議論の仕方に気をつけないといけないということです。僕は立花先生がそうだと言っているわけではないんですが。

今：でも確かに全くそのとおりで、じゃあ立花隆先生が意図していたこと、あるいはしていなかったこと、あるいはその結果。そういう見方もできるし、その可能性もあるであろうということをやっぱり、そもそも私は何の疑いもなく読んで面白いなと、共産党は間抜けだなという感じを持っていたので、それは確かに踊らされている可能性があるわけですね。

20:10

江：そこをやっぱり気をつけて見ていくということが、繰り返し言いますけれども大事で。だから僕はこの本で一貫して言っているのが、自分の頭で死にものぐるいで考えましょう。僕自身の考えが正しいなんて思わなくていいです。自分の頭でちゃんと考えていくことが大事である。

今：しかもそれを続けていくということですね。

江：そうです。

今：ありがとうございます。その共産党なんですけれども、そもそもコミンテルンが議会多数を抑えるなんていう狙いはそもそも、さらさらなくて、議会制民主主義を破壊するために議会の中に潜り込んで、議会を利用する。あるいは議会の信用を失墜させるような工作を行うと言ったような考えを持っている組織。現在の左派政党も同じ行動原理を持っているというところについて、教えていただけますでしょうか。

江：だからこの本でも縷々書いたんですが、コミンテルンが色んなテーゼを出しているんですが、その1つに議会制民主主義というものをどう捉えるのかという話の中で、議会制民主主義というのは資本主義社会が労働者階級を懐柔、要するに労働者階級の意見を取り入れることで革命を抑止するためにできたのが議会であって、労働者階級は議会制民主主義に入った結果、革命は起こせなくなるんだと。だから議会制民主主義というものは基本的には労働者階級にとって敵の制度であるというのがコミンテルンの考え方なんです。じゃあ共産党は議会制民主主義に参加しなくていいのかと言ったら、「参加すべきである」。なんでか。議会制民主主義、議会に参加することで議会制民主主義がいかに機能していないのか、政治家がいかに愚かで自分のことしか考えていないのかという、プロパガンダの場として議会を利用すべきである、「議会制民主主義を破壊するために議会を利用すべきだ」というのがコミンテルンの基本的なテーゼなんです。そのテーゼに基づいて国会を使って、政治家の愚かさや与党のデタラメぶり、お金に汚いぶり、不倫をプロパガンダすべきだという概念を残念ながら今の日本の野党は引き継いでやっているように見える。

今：確かに全くそのご指摘通り、目的は同じなのかもしれないですね。

江：自覚的にじゃあ野党がやっているのかというと、そうじゃなくて、僕からするとここにあるようにデュープスだと思うんですね。自分達がやっていることの意味をわかっていない。

今：これが正しいと思ってやっている。

江：思っている。でも結果的にそういうコミンテルンや共産党の革命戦略に協力してしまっているんですよ、野党の皆さん。そんな愚かなことをやっていいんですかというのが僕の提案で。

今：そうですね。結果がどうなるかというところまで考えていなくても、全くそうですね。ある意味これは成功しているわけですね。政治不信だとか、あるいは国会が馬鹿馬鹿しいとか、不倫の話なんかまさにそうですね。

江：そういう風にして成功している。それをやっているのは、コミンテルンの革命戦略に結果的に乗ってますよ。実はだからこういうコミンテルンの議会制民主主義破壊のテーゼがあるので、その結果イギリスでもアメリカでも共産党はデモクラシーを守るために、共産党は非合法化しているわけです。これは何かと言うと、議会制民主主義を守るためにも、議会制民主主義の破壊を叫ぶ共産党は入れないという、政治活動の自由を守るために共産党を入れないというのがアメリカやイギリスのまともな民主主義国家の考え方です。

今：政治的自由を破壊することを目的にしている政党は認めないということです。

江：認めないということ。今の共産党がそういうコミンテルンのテーゼをやっている

とは本人達は絶対言わないので。僕は別に共産党を非合法化しなきゃいけないとは思っていませんが。

25:00

ただ逆にあなた方がやっていることは、結果的に議会制民主主義の破壊工作だよねと。そういうやり方をするのであるならば、議会制民主主義を守るために何らかの法的措置を取らざるを得ないような状況になっていくけど、それでいいのという議論はしなきゃいけないと思いますね。

今：そうですね。

江：僕はそうした言論の自由、政治活動の自由は守るべきだという立場ですが。

今：重要ですね。あとは、すごく重要なところなんですけれども、欧米諸国では、まさにこの中西輝政先生がご専門でもいらっしゃると思うんですけれども、いわゆるインテリジェンスや情報史を扱うインテリジェンス・ヒストリー。これは情報史学、情報の歴史の学問。あるいは諜報史、諜報史研究などと呼ぶそうなんですけれども、こうした学問がすでに国際政治学や外交史の一分野として確立されているということなんですけれども。我が国は明らかに立ち遅れていると思うんですね。この分野について現在の動き、状況について教えていただけますでしょうか。

江：京都大学の中西輝政先生がイギリスで留学をして国際政治の研究をされていく中で、国際政治の中において、外交史の中でこういうスパイとかインテリジェンスとか秘密工作とか、プロパガンダとか、こういうものが国際政治にもものすごい大きな影響を与えているという認識に基づいて、こういうインテリジェンスというものを理解しないと、国際政治は解き明かすことはできないという痛苦的な反省が第二次世界大戦後、アメリカやイギリスも含めたヨーロッパ諸国で生まれまして。現実にはソ連の脅威というものがあったわけです。その関係の中で秘密工作というものと、国際政治の関係を学問としてやる。先程の例えばフーバーの言っている党員、非公然の党員、フェ

ロートラベラーズ、オポチュニスト、デュープス。こういう共産主義者達の分類の枠組みとか、あと国際政治でよく我々言うのは鉄・金・紙というんですね。鉄というのが軍事力・経済力。金というのは経済力。紙というのは外交ですね。この鉄・金・紙、この3つによって国際政治は動くんだと言われているんですが、この紙の中にインテリジェンスというものもある。だからインテリジェンスというものも国際政治を動かす上での大きな要因であるという国際政治の分析の手法が第二次世界大戦後、進化してきているんですね。進化した、新しい国際政治の分析の枠組みというものがインテリジェンス・ヒストリーという学問としてイギリスを中心に欧米社会に急速に広まって、この学問を修めた人間達が対外情報機関を支えているわけです。だから変な話ですが、中国共産党はけしからんという暇があるなら、なぜ中国共産党がどういう戦略でアメリカに浸透していき、どういう戦略で日本や東南アジアに浸透しているのかということをきちんと情報収集し分析することが大事である。中国を非難しても何の意味もない。という形で情報収集・分析をやるという対外情報機関ができています。これがCIAでありアメリカの海軍・陸軍の情報部でありインテリジェンス・オフィサー達なわけですが。そういう学問的な枠組みが世界で広がっているにも関わらず、我が国だけがこのインテリジェンス・ヒストリーという学問があることも知らない。大学でそういう学部は他にもあるのに、世界中に。日本だけはそういう学部さえもない。だからインテリジェンスも含めた対外情報部門が日本ではいまだに育たないという現実的な問題を抱えていて、だから残念ながらいまだに「中国はすぐ滅びるぞ」みたいなことばかり皆言って、中国の内情をきちんと分析する学問が育たない。

30:00

そういうような言論界の拙さというのか、子供の遊びみたいな学問、言論界のあり方を改善する必要があるという意味でインテリジェンス・ヒストリーという新しい学問を我が国も導入しましょうというのが中西先生の一貫した問題提起で、僕もその末席の末席の末席ぐらいにいるわけですが、ささやかながら中西先生達のお話を一所懸命聞きながら、そういう学問があるので。僕は専門家ではないんですけども、そういう学問を勉強していうようにしませんかということですね。

今：非常に素晴らしい。

江：日本でもようやく『スパイ大辞典』とか、欧米のインテリジェンス・ヒストリーの枠組みやそれに関する本が日本でもようやく翻訳されて出て来るようになった。実はこの『裏切られた自由』のジョージ・ナッシュのこの本も、そういうインテリジェンス工作と国際政治、アメリカ政治の関係について書いてる本なんですね。これもいわゆるインテリジェンス・ヒストリーというものなんです。そういうような新しい、こういうものがようやく日本でも翻訳されるようになって本当に良かったですよね。

今：やっぱり流れが変わってきているんだなと。

江：変わってきているし、インターネットの時代になって、マスコミの情報隠蔽工作が通じなくなったのと、何より中西輝政先生とか、ああいう見識のある方々が一所懸命我々にこういう新しい分野があるんだということを教えてくれて、そういうことを理解する読者が増えてきているのも大きいと思いますね。

今：まさに江崎先生のご著作が好調に売れているというのも非常にいいことだと思うんですね。認識が広まってくれば。

江：そうですね。謀略という言葉を書いているので、読みもせずに「謀略論だ」みたいなことを言う変な評論家もいますが。僕はどうでもいいんですが。そういう自分の無知をさらけ出しているだけなので。きちんとした学問があるということを、ぜひとも皆さんに理解をしていただけるといいなと。

今：そうですね。かなり今この辺のお聞きしようと思っていたことを、今かなり伺えたんですけれども。ちょっと戻って、これもおっしゃっていただいたんですけれども、特定秘密保護法。それから今議論が進んでいるはずというか、求められているスパイ防止法。これらについて、おっしゃっていただきましたけれども、どのようにお考えになっていらっしゃいますでしょうか。

江：特定秘密保護法という法律が議論された時に、あれは特定秘密というのは軍事上

の機密情報を同盟国であるアメリカなんかと共有していくためにも、そういう軍事機密というものが漏洩しないように、きちんとした枠組みと情報を守るための仕組みを作りましょうという形でアメリカと連携をしていく。イギリスなんかも含めてですね。というために特定秘密保護法という法律を作ったわけですね。それはそれでいいんですが、あれをすると言論の自由が損なわれるとか、色んな批判があるんですが、じゃああの法律ができたことで、それに関する担当者と話をした時に、まず基本的な問題で言うと、特定秘密というアメリカの軍事機密に関わることができる人はほとんど官邸の人なんですよね。

今：少ないですね、すごく。

江：聞いたんですが、皆さんは特定秘密保護法違反をする可能性がある人は官邸の人がほとんどになるんだけど、官邸にあなた方警察は踏み込めると、言ったら絶句しちゃって。

今：想定していないということ。

江：想定していない。そもそも、じゃあ何のためにこれをやっているのと。何のためにやっているのという話で、要はこの尾崎だって官邸に机をもらっていたわけで。本当の中枢のスパイというのは官邸とか霞が関にいたので、一般の人間がそんな高度の国家機密に関与できるやつなんてほとんどいないので。

今：そうなんですよ。まさにおっしゃるとおりで尾崎の検挙にしても、ゾルゲだってそもそも簡単に手を出せる立場にはいなかったわけですからね。

35:05

相当苦労して検挙に至ったんだと思うんですけども、同じようなことが起きた時に、官邸に行けるのか。

江：そういう問題がまず大きな問題として1つあるのと、例えば特定秘密保護法ができたおかげで、北朝鮮のミサイルに関する情報なんかも円滑に取れるようになったというようなことを安倍政権は言っているわけですが。そういう側面は多分あるんでしょう。それは、僕は中にいないからわからないですが。ただはっきり言わせてもらいますが、例えばアメリカの軍の情報部と連携して自衛隊も連絡官といって、駐在武官とは別なんです、自衛隊の将校がアメリカの軍の方の情報部と連携してやっているわけですね、仕事を。じゃあ情報部と連携してやっている自衛隊の将校達が、特定秘密保護法ができたおかげで、より高度なレベルの情報を入手できるようになったのかという話ですが、現実にはノーですね。何の関係もないです。なんでかということ、例えば1枚の地図を見せられて、これが何を意味しているかを理解できる人間でなければ彼らは見せません。

今：本来情報というのはそういうことですよ。

江：つまりインテリジェンスも含めた国家機密というものが、どういう意味を持っていて、これが何を意味するのかを理解できるだけのインテリジェンスに関する能力を持った人間じゃなければ彼らには相手にしてもらえないんです。いくら法律的整備があったって、その能力を持っている人間がいなければ彼らは相手にしません。つまりアメリカの機密情報を貰えるようにはならないんです。

今：そこからですね。先程のまさに情報史学のものもそうなんですけども、まず根本的に法律を作ったとか、組織を今立ち上げましたというところで、いきなり機能するようなものではないと。

江：だって変な話だけど、法律や制度を作って日本のレベルが上がるなら、日本もこれから法律を作って日本のサッカーチームが全部ワールドカップに出れるようにすると書けばいい。馬鹿馬鹿しい。本当に馬鹿馬鹿しいったらありゃしないという話で、何言っているのという話。僕からすれば。本当に。憲法9条があるから日本は戦争に巻き込まれないと9条論者を批判する保守の人が、スパイ防止法ができればスパイが

防止できるって何言ってるんだと。言っていること一緒じゃないと。

今：田中美知太郎が「憲法 9 条で戦争が防げるなら、じゃあなんで台風も禁止しておかなかったんだ」という話がありますけど、それはそういうことですね。

江：それと同じで、法律を作ったり何かをすれば、それで何かが全部改善されるのか。そんなことなく、問題はそれを運用する人達が力をつけて、能力を身に着けなければ所詮法律は紙くずで、それを運用する力を持った人間たちを作らなければ物事は成り立たないんです。とりわけ情報の部門で言うと、例えばアメリカのトランプ政権のグループ達と色々連携すると言って、外務省の連中はアメリカの 국무省の連中と一所懸命話をしているわけですが、アメリカの 국무省とトランプはものすごく関係が悪くて、 국무省の言ってることなんか聞いてやれるかというのがトランプの言っていることで、 국무省の人間といくら話したってトランプのことまでわからないんですよ。わからない。じゃあトランプ政権の外交政策を実際的にやっている連中は誰かと言ったら軍の情報部ですよ。だからその軍の情報部の連中達と話をしない限り、トランプの外交戦略なんて見えてこないわけですが、相変わらず日本の外務省はカウンターパートの 국무省と話している。だからトンチンカンなことをやるし、去年のトランプ政権の誕生も見えない。だから要はアメリカの政治バランスやアメリカの政策決定がどういう形で行われているかという、基本的な分析をやる能力を持っていないから、外務省の連中。

40:02

だからアメリカのインテリジェンスから相手にされないわけで。繰り返しますが、基本的なところを何もわかっていない。

今：これはまさに先生がこちらのご著作（『マスコミが報じないトランプ台頭の秘密』）で主張されているのが、まさにトランプが大統領になる可能性が高いんだから、「それに備えろ」と、全然情報収集も対策も何も考えていないということをおっしゃって、その通りになったわけですけども。そういう根本的な問題は共通して、今のまま来ちゃっているわけですよ。

江：だから日本の保守の人は、「外務省は何をやっているんだ」と外務省を叩くのが好きだけれども、ごめんなさい、外務省を叩いたって日本のインテリジェンス能力は高くなりません。無理です。何でかという、申し訳ないけど、そんな力ないもの。それよりも国民の側がきちんと賢くなって、自分達が政治家とか何とかを引き上げるように努力をしていくことしかないんです。ワールドカップに出ようと思えば一所懸命有能な選手を育てていくしかないんです。もうそれしかないんですよ。

今：そういうことなんですね。

江：だからそこを皆さんきちんと理解しましょうという話です。僕からすると。

今：単純化した左右対立で何かが解決するわけでもなければ、朝日新聞を潰せと言っても何かが解決するわけでもない。

江：特定秘密保護法という法律の枠組みを作るのはいいけど、作った上でそれを運用できる人材育成までしなければ、その法律を運用することにはならないんだという話なんです。だから僕は特定秘密保護法を作ることがダメだと言っているんじゃないんです。作った上で、運用する人間を育てなきゃいけない。

今：そのための体制についての議論が乏しいというか。

江：それを運用するためには先程のインテリジェンス・ヒストリーも含めた、そういう学問的な基盤を持った人達をまず作ることから始めないといけないよと。だから中西先生もインテリジェンスのことを言うに当たって、インテリジェンスという学問をまず学ぶ人を増やすことから始めましょう。今更そんなこと言ったって間に合うのかという話はすみませんが、そうしていくしかないんです。急ぐのはあれです。

今：始めなければ。

江：と思います。

今：今かなりお話いただきましたが、最後にご視聴頂いている皆様にメッセージをお願いいたします。

江：だから僕は別に専門家でもなくて中西輝政先生達のご指導をいただきながらやってきた人間ですが、たまたま米軍のインテリジェンス・オフィサー達と付き合いがあって、彼らと話をするんですけども。国際政治というものは軍事、経済、それから外交、そしてインテリジェンス。この4分野というもののうちの戦いが行われている。経済の中には要するに貿易というレベルのものと金融というものがあります。そういうような多角的な戦い方をしながら、今日本、世界中が自分達の国益を守る戦いをしているんです。残念ながら我が国の場合は政治、外交分野と、軍事のことはある程度わかっているかもしれないけど、それ以外の金融とかインテリジェンスというところが全然まだ日本人達の射程に入っていないんですね。そういうところを射程に入れていく前提として僕はまずインテリジェンスということと、経済というものの重要性を理解することが国を守ることであって、憲法改正はもちろん大事なんですけど、憲法改正と同じようにインテリジェンス、プロパガンダ、それから経済・金融というものが大事だということも、視野を広く物事を見てもらえるようにしていただけると日本の再建のスピードはもっと僕は早くなっていくという風に思います。そういう意味で人の批判をするのは簡単なんですけど、自分達のレベルを上げるのは大変です。

45:04

その自分達のレベルを上げることに限られたリソース、限られた時間と能力、お金を使っていく人が増えることを、本当に期待している次第です。

今：どうもありがとうございます。本日は長時間どうもありがとうございました。